

目次

第1章 産学連携推進員育成講座開発委員会

- 1-1 産学連携推進員育成講座開発委員会の概要
- 1-2 育成したい人材像

第2章 産学連携推進員に必要な資質・要件を明らかにするためのアンケート調査

- 2-1 産学連携推進員に必要な資質・要件を明らかにするためのアンケート調査概要
- 2-2 アンケート調査結果

第3章 産学連携推進員の人材像と必要な資質等を把握するヒアリング調査

- 3-1 産学連携推進員の人材像と必要な資質等を把握するヒアリング調査概要
- 3-2 ヒアリング調査結果
- 3-3 ヒアリング調査結果から見えたこと

第4章 『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』検証講座

- 4-1 第1回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』概要
- 4-2 第1回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』終了後アンケート結果
- 4-3 第2回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』概要
- 4-4 第2回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』終了後アンケート結果
- 4-5 『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』検証結果

第5章 産学連携推進リーダー育成講座

- 5-1 産学連携推進リーダー育成講座概要
- 5-2 産学連携推進リーダー育成講座研修終了後アンケート結果

第6章 まとめ

- 6-1 産学連携推進育成講座完成版について
- 6-2 産学連携推進リーダー育成講座完成版について
- 6-3 成果の活用と今後の課題

第1章 産学連携推進員育成講座開発委員会

1-1 産学連携推進員育成講座開発委員会の概要

この事業は、文部科学省委託事業「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」における、産学連携推進員育成講座の開発「教職員の資質能力向上に必要な教職員研修プログラムの構築・普及・推進」の取組の一環として実施されたものである。

本事業では、産学連携推進員育成講座の開発へ向けて、産学連携を推進していくための目的を設定した。

職業教育において産学連携がもたらす代表的なメリットについては①（学習目標の明確化）職業教育の学習目標を明確化し実践的なスキルや知識を身に付けること、②（実践的な教育の実現）実際の業務を体験できる実習や就業体験など実践的な教育を実現すること、③（最新のトレンドや技術の習得）最新のトレンドや技術を取り入れたカリキュラムを提供すること、④（就職支援の強化）就職活動や就業後のサポートを受けること、⑤（地域産業の活性化）産学連携の促進により地域産業の発展に貢献すること、と定義した。

こうしたメリットを最大限に活用するために学校と企業の連携を積極的に推進するための人材配置が重要であると考えた。

【産学連携推進委員会メンバー】※敬称略

- ・ 監督：岡村 慎一 学校法人 YIC 学院（京都）
- ・ 委員長：柳田 祐大 学校法人国際中央学園（群馬）
- ・ 副委員長：森川 和哉 学校法人穴吹学園（香川）
- ・ 委員：三村 隆男 早稲田大学（東京）
- ・ 委員：林 透 金沢大学教学マネジメントセンター（石川）
- ・ 委員：土井 宏美 学校法人 YIC 学院京都（京都）
- ・ 委員：石田 哲也 学校法人浦山学園（富山）
- ・ 委員：久代 英俊 学校法人国際総合学園（新潟）
- ・ 委員：伊藤 政幸 学校法人龍澤学館（岩手）
- ・ 事務局：飯塚 正成

1-2 育成したい人材像

本事業として育成したい人材としては、地元の企業や産業とコミュニケーションをとり、必要とされる人材のニーズを的確に捉えた教育カリキュラムが設計できる。

また、地域の活性化に貢献できる人材育成を産学と連携して構築でき、主に専門学校などの職業教育機関独自の連携スタイルを作成できる人材を目標とする。

【令和5年度の到達目標・成果物】

〈到達目標〉

- ・各地域や産業の特性を踏まえた推進員に必要な資質・要件を明らかにする。
- ・産学連携推進員育成講座の開発方針とサンプル教材を開発する。

〈成果物〉

- ・産学連携推進員の資質・要件を明らかにするためのアンケート調査報告書
- ・産学連携推進員の資質・要件を明らかにするためのヒアリング調査報告書
- ・令和5年度_産学連携推進員育成開発講座事業報告
- ・産学連携推進員に関する育成講座の方向性「進行スライド(案)」「シナリオ(案)」

【令和6年度の到達目標・成果物】

〈到達目標〉

- ・産学連携推進員育成講座を開発・検証し完成する。
- ・産学連携推進員育成講座を担当するファシリテータ養成の方針を検討する。

〈成果物〉

- ・産学連携推進員育成講座検証結果報告書
- ・産学連携推進員育成講座
- ・産学連携推進員育成講座担当ファシリテータ養成方針等報告書

【令和7年度の到達目標・成果物】

〈到達目標〉

- ・「産学連携推進リーダー育成講座」を開発・検証する。
- ・本事業にて開発する「産学連携推進員育成講座」の全国展開を準備する。

(オンライン含む)

〈成果物〉

- ・「産学連携推進リーダー育成講座」
- ・「産学連携推進リーダー育成講座」実績報告書(3カ年のまとめ)

第2章 産学連携推進員に必要な資質・要件を明らかにするためのアンケート調査

2-1 産学連携推進員に必要な資質・要件を明らかにするためのアンケート調査概要

令和5年度の事業においては、研修プログラムを開発するための準備段階として、各地域や産業の特性を踏まえた「産学連携推進員」に必要な資質・要件を明らかにするためのWebアンケートを実施した。調査対象は全国専門学校教育研究会加盟校約120校とした。

【調査項目】

- ・産学連携授業を実施している時間数
- ・産学連携授業で実施している内容
- ・現在の主な連携先企業・団体名
- ・連携のアプローチは学校側からか企業・団体側からか
- ・現在の産学連携授業についての満足度
- ・現在の取り組みについて「満足している・していない」理由
- ・好事例と感じた授業について評価できた点
- ・さらなる充実のためにどんな校内外の支援が必要か
- ・課題解決や改善のために行っている方法
- ・課題解決や改善のための校内外の支援
- ・産学連携授業の実施時期
- ・産学連携授業のカリキュラムによる位置づけ
- ・連携先の選定はどのように行っているか
- ・貴学に産学連携推進の明確な担当教員はいるか
- ・産学連携に関わる学科の教員数は何名か
- ・担当教員の役職は
- ・求められる「知識」「技能」「態度」について
- ・ご自身は産学連携推進担当の経験があるか
- ・担当教員に対してどのような支援があるか
- ・担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握しているか
- ・どんな方法・頻度・内容で進捗管理するのが望ましいか
- ・担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか
- ・現在の連携体制

- ・連携を推進する上での組織的な課題
- ・どのように事業評価をしているか
- ・事業の評価規準は明確に設定できているか
- ・評価規準は校内に周知されているか
- ・産学連携授業について改善の予定があるか
- ・産学連携授業を行った成果として理想のフィードバック
- ・産学連携授業を通して学生にもたらしたい価値

2-2 アンケート調査結果

【実施期間】

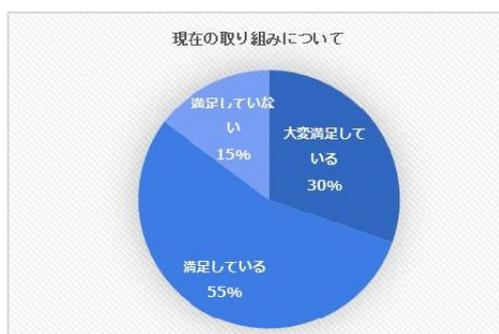
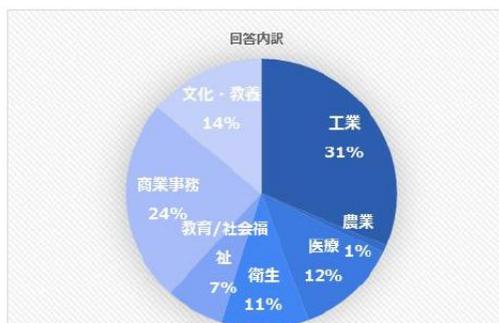
令和5年9月19日～9月29日

【回答数】

115件

【特徴】

- ・経験年数は15年以上が過半数を占めた。
- ・現在の取り組みについて「満足している」の内訳が大きく、「まったく満足していない」はゼロであった。



【学科の実態】

- ・教員数：中央値で3名 ※ただし、学科の規模感により1名～8名まで幅がある
- ・教員の役職：部長、教務課長、学科長が主であった。主任、教員の場合もあるが、部長と教員が役割分担をして連携しているケースも複数みられた。



- ・現在の取り組みについての「満足度」と特定の担当教員が「いる」「いない」かについては、「特定の担当教員」がいない場合の方が「大変満足している」の回答者が約2倍。

【大変満足している・満足している教員】

- ・「領域に関する最先端の情報が得られる」というより高度なインプットと、「実務に活かせるスキル習得」という実践的な講義内容が実現している点において、産学連携の必要性と価値を実感している。

【満足していない教員】

- ・「満足していない」と回答している教員については、その多くがカリキュラムの改善や事業評価レベルの不満ではなく、現状の課題解決視点（物理的な制約、講師や連携先の不足、コーディネートの課題）で課題感を持っている。

【共通】

- ・求められる資質・能力については、概ね回答の傾向が似ており、分野横断的に共通して以下が上げられる。
 - ・知識＝その分野ならではの要素
 - ・能力＝コミュニケーション力を中心に、一般的な汎用スキル
 - ・態度＝先端情報に興味関心を持って触れるなど、「挑戦」「学び続ける」姿勢

【現在の取り組みに満足している理由】

①学生の成長が見える

- ・実地、実務経験を通じて実践的なスキルや知識を獲得し、学生の成長を実感している。
- ・授業で学んだ理論を実務現場で具体的に展開できる機会を提供している。
- ・学生一人ひとりに合わせた個別指導やサポートを行っているケースもあり、それが成長実感につながっている。

②実践的な経験

- ・学生が実際の現場で活動し、仕事やプロジェクトを遂行できる機会を提供している。
- ・現実的な課題解決と実利を伴った活動が学習の一部として組み込まれている。

③連携企業との協力

- ・連携企業との協力により、実際の業界の課題に取り組み、提案や解決策を提示する機会を提供している。

④新しい視点の獲得

- ・企業との協力により学生に新たな視点やアイデアをもたらす創造性を育てている。

【満足している先生方の成功しているケースに見られる共通する要素】

①ビジネス追体験

- ・イベントの立ち上げブース企画に学生が〈参加〉し、実際の〈利益〉を上げた
- ・業務を〈依頼〉され、クライアントから評価を受ける

②外部評価、実社会との接続

- ・アイデアやデザインが世間に発信され、評価される機会がある

【特に「大変満足している」先生方が、高く評価しているケースに共通する要素】

①リアルタイムなトピックの吸収

- ・「今大切なこと」に合わせ内容をアップデートしリアルタイムなトピックを題材に学ぶ
- ➔学習意欲の高まりや、動機付けにつながる

②実践的な経験の提供と専門家の指導

- ・実践的スキルや知識を獲得できる機会。プロである専門家の直接的な指導があるとよい
- ➔学生は理論だけでなく実務に関する洞察を得る

③産学連携・双方の利益

- ・学生は企業の最新技術や現場経験を得る一方、企業も新たな視点やアイデアを学生から得られる。
- ➔双方が成長する機会として評価できる。学校と企業の連携が双方に利益をもたらす形

が理想的。

④地域社会への貢献

- ・地域社会と連携し、地元資源を活用したプロジェクトや活動。学生は地元の課題や産業に貢献する

➔社会的な使命感が高まっていることが理想的と考えている

⑤対話とコミュニケーション

- ・外部連携を通じて、学生は異なる背景や年齢層の人々とコミュニケーションする機会が増える

➔コミュニケーション能力の向上に直接的に寄与

※「大変満足している」と答えた先生方の回答からは、産学連携の目的や本質への深い理解や高いコミットメント（双方の利益の重視や社会貢献を通じた成長を促すアプローチなど）が見受けられる

【「満足している」先生方が高く評価するケースに共通する要素のうち、「大変満足している」先生方と異なる点】

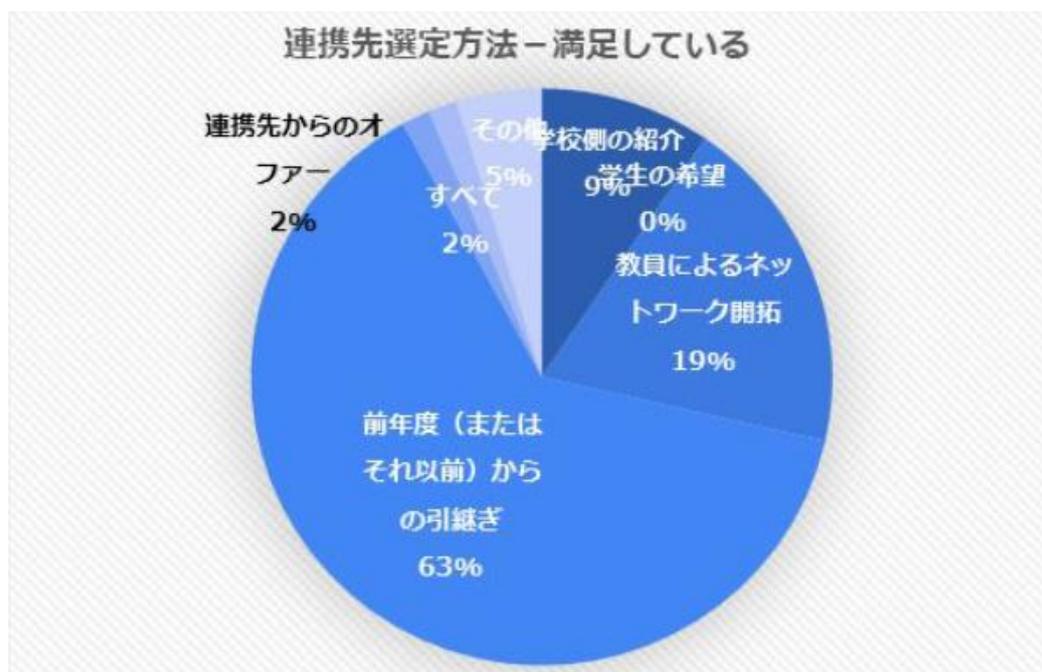
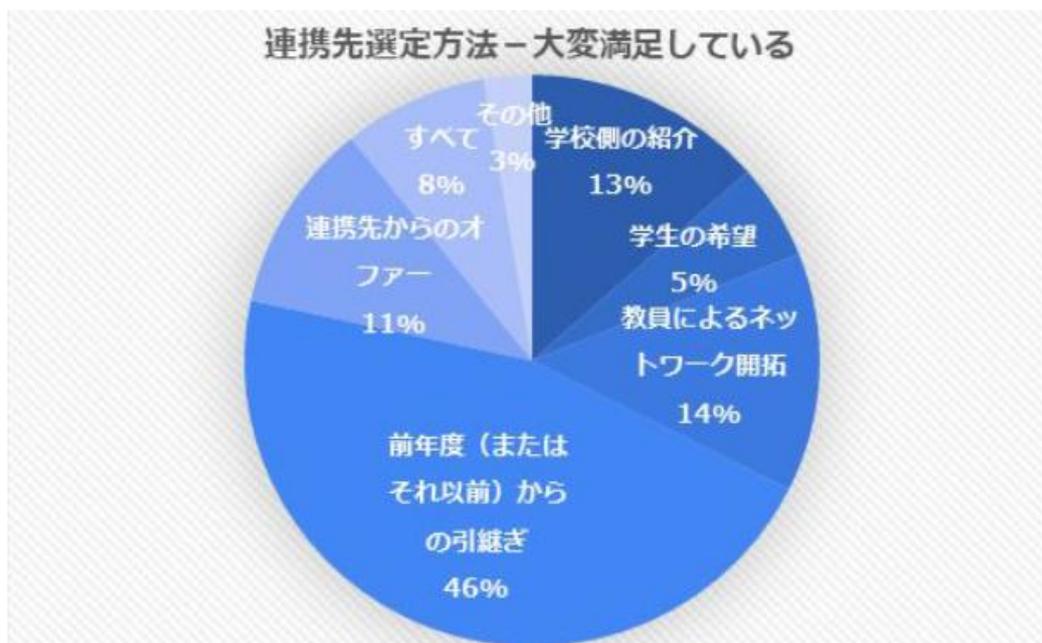
- ①専門家や企業からの成果物の評価：学生の成果物に対する外部評価で、自信や学習意欲の向上を期待する
- ②学生の自律性と積極性への期待：外部講師や仲間との問題解決のプロセスを共に進める機会を求める

【「満足している」先生方の考えられる潜在ニーズ】

①学生の成長促進に重点を置いたプログラム

- ・より多くの現場経験やプロジェクトへの参加機会を提供したい
- ・学生の個別ニーズに合わせた指導やサポートが評価されているため、個別カウンセリングやメンターシッププログラムなど、学生の発展を促進する取り組みを充実したい
- ・連携企業と協力し、現実的な業界の課題に取り組む実務的な機会を提供したい

②将来のキャリアに向けたイメージ形成を支援するプログラム



【「満足している」先生方が、連携先との調整に際し重視していること】

- ①学ばせたい講義内容：講義内容および学生の成長と学びの質を向上させることを重視
- ②双方にメリットがある連携：学校と企業・機関の双方にとってメリットがある形かどうか、そのバランス
- ③プロの視点やアドバイス：学生に対して、連携先からのプロの視点や実務経験からくる

洞察や評価

- ④共有の目標：到達目標を共有することが強調、学生の成果や目標を明確にする
- ⑤現場経験の有無：学生に実務経験を提供できるかどうか、実際の業務を体験する機会が含まれているか
- ⑥負担やスケジュールの配慮：学生や連携先に対する負担やスケジュールの妥当性について重視
- ⑦差別化要因：学生にとって他校との差別化要因となるスキルや経験を提供できるか

【「大変満足している」先生方が、外部連携において調整に際し特に重視していること】

- ①共感とビジョン共有：連携先との間で共通のビジョンや理念を共有し、連携の目的や意義を明確に伝えることを重要視している。連携が共感に基づいている場合、協力がより効果的に進行すると考えられている。
- ②学習目標や取り組みに対する説明：学生がどのような学習目標を持ち、連携先に対する具体的な要望や取り組み内容を明確に伝える。学校の理念や方向性を連携先に伝え、共感を求める。
- ③双方のメリットと予算への配慮：双方にとってメリットがあるかに加え、予算や負担に関しても注意が払われており、連携が双方にとって負担の少ない形をめざしている
- ④地域社会への貢献：学校と連携先が地域社会の発展に寄与、特に協働的に地域社会への貢献や発展につながる活動にできるか

※「満足している」先生方は、学生のスキルの獲得（学習的観点）と成長（キャリア的観点）の両立を重視していることが見てとれる。連携先と学校側の協力を通じて、学生のキャリア開発に貢献することが期待されている。「大変満足している」先生方は、さらに双方にとってのWIN-WINの関係を目指し、信頼と協力ベースに

【「大変満足している」先生方が、外部連携先との事前の打ち合わせの際において重視していること】

- ①評価方法の共有：実習期間における学生の評価方法についても連携先との事前打ち合わせで確認。評価基準や項目が明確に共有され、学生の成績評価に関する誤解や不明確な点が回避される。
- ②定期的な意見交換と修正：年間計画の流れや授業内容について、定期的な意見交換と修正が行われる。これにより、実施計画が柔軟に調整され、連携が継続的に改善される。
- ③教育目的の共有：教育目的や学生の姿勢についても連携先と共有する
- ④双方のニーズと提案の共有：連携先と学校は互いのニーズを共有し、提案内容について

共同で議論して決定

【「満足している」先生方が事前の打ち合わせの際に重要視していること】

- ①実習の過去の状況の共有：事前打ち合わせでは、前年度の実習状況や経験が共有され、連携が過去の実績を踏まえて調整されている
 - ②学生の特徴とスキルの確認：学生の性格やスキルレベルについての情報が連携先に提供され、実習内容や授業が学生に合わせて調整されている
- ※「満足している」と回答した先生方においては、一人一人の学生の細やかなサポート等も含めリスクヘッジの要素が強調される。また、前年度までの内容に基づいて調整するパターンも多く WIN-WIN な連携にするための視点で事前の打ち合わせが進められている「大変満足している」先生方と比較すると、実務的な確認や調整を重視している。

【「満足していない」先生方の、現在の取り組みに関する意見の意向】

- ①出口との接続：就職先が明確でない。特にゲーム業界については、就職支援が不十分であり、就職実績が充分でないとの指摘あり
- ②最新情報の不足：関連する分野の最新情報や傾向に対するアクセスが制限されており、教育内容を最新のものにできていないという課題感
- ③地域的、内容的限定性：地方においては、開発案件や連携協力企業が限られている
- ④学生評価と実績の不一致：企業からの指導により技術向上を図っているものの、学生の対外的な評価が低く、就職に結びついていない課題感

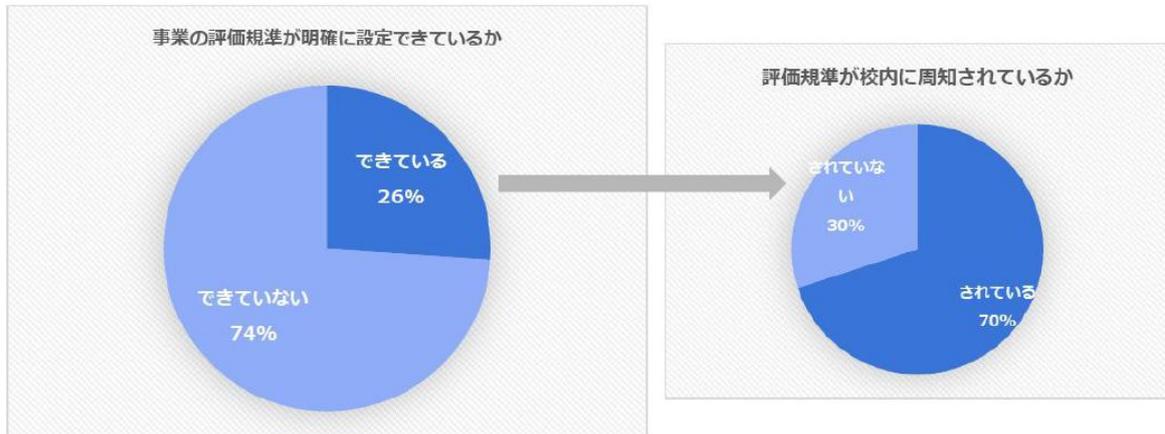
【「満足していない」先生方の、現在の取り組みに関する顕在ニーズへの対応】

- ①業界の最新情報提供：先生ご自身が最新情報や傾向にアクセスできる仕組みづくり
 - ②地域ならではの・地域連携強化：地方でも可能な形の連携を増やし多様な機会を提供する
 - ③特化的な連携の強化：特にゲーム業界への専門的なサポートの戦略的強化
- ※課題感を感じている先生方のニーズから、専門学校的外部連携の改善には、最新情報提供、地域連携の強化、専門的な支援の拡充が必要であること、そのニーズは地域と分野により差が大きいことが明らかである。物理的な制約の克服に取り組むとともに、事業において、スキルの習得・就職への接続以外の付加価値を評価できるような施策が重要である。

【現在の評価方法】

- ・複数の評価手法を組み合わせているパターンが最も多い
- ・最も多い方法は「学生からのアンケート／ヒアリング」、次に「連携先からのアンケート／ヒアリング」、「教員間のアンケート／ヒアリング」、「外部の有識者からの評価」「管理職による評価」はまだ少数

- ・現状7割強が明確な規準が設定できておらず、「事業評価」するレベルに至っていない
- ・評価基準が設定できている学科については、その7割が全校にその規準が周知されており、全校的な取り組みの理解が推進されている



【産学連携により、教員が学生にもたらしたい価値の傾向】

- ・将来の確定と就職意識向上
- ・社会人マナーと進路に向き合う機会
- ・社会人基礎力と職業観の醸成
- ・自己の経験を通じた楽しさ
- ・実践的な学びと業界理解
- ・連携授業の重要性と将来の職業選択
- ・資格取得や技術開発
- ・職業人としての倫理観
- ・業界の実態と価値感
- ・社会への貢献と責任感
- ・実際の現場での経験
- ・知識・技術と習得と経験活用
- ・非認知スキルの向上
- ・キャリア向上と就業意欲
- ・主体的な学びと将来像
- ・課題解決力と人間力

第3章 産学連携推進員の人材像と必要な資質等を把握するヒアリング調査

3-1 産学連携推進員の人材像と必要な資質等を把握するヒアリング調査概要

アンケート調査を実施後、当該人材の資質・要件をさらに深掘りすることおよび、ケーススタディ情報等を収集することを目的とし、アンケート調査から抽出した産学連携について先進的な取り組みを行っている専門学校6校（内訳：対面3校・オンライン3校）を調査対象とした。各校2名程度の調査員を派遣またはオンラインにて情報を収集・整理するためにヒアリング調査を実施した。

【調査ポイント】

- ・回答者の3割を占め今後のニーズが見込まれる「工業分野」をメインターゲットとする
- ・好事例からシナリオを検討するため「大変満足している」と回答した教員を対象とする
- ・「大変満足している」と回答した教員のうち、事業評価について、「できている」「できていない」それぞれ1名ずつとする。
- ・経験年数が比較的若い層（5年～10年）を含める。理由としては現状のカリキュラムポリシーにもとづく「事業評価」の実態と今後の導入に向けた課題を把握し、研修内に評価の要素をどのように取り入れるべきかを検討する。また、今後のリーダー育成をめざすため経験の若い教員のニーズを把握する。
- ・「満足している」「満足していない」と回答した教員のなかから、カリキュラムレベルで課題感や改善必要性を感じている方についても1名対象とする。

【ヒアリング実施期間】

令和5年11月16日～28日

【ヒアリング調査にご協力いただいた学校】

- 龍澤学園（岩手県）盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校
- 国際総合学園（新潟県）ncc新潟コンピュータ専門学校
- 穴吹学園（広島県）穴吹ビジネス専門学校
- つくば総合学院（茨城県）つくばビジネスカレッジ専門学校
- 有坂中央学園（群馬県）専門学校 中央情報大学校
- 宮崎総合学園（宮崎県）宮崎情報ビジネス医療専門学校

3-2 ヒアリング調査結果

○龍澤学園（岩手県）盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校

調査日：令和5年11月16日（木）16：00～17：30

調査方法：委員2名によるオンライン調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

- ・学科名・・・情報ビジネス科
- ・目標・・・学んだ知識をアウトプットする場とし社会経済のキャッシュフローを経験
- ・時数・・・60時間

→明確に企業とからんで何かをする時間が60時間。これ以外に課外活動（土曜日や放課後等）で企業連携を行っている。活動時間は少なくとも倍程度。

【産学連携授業を実施している内容】

- ・商品またはサービスの企画を行い連携企業の選定および協力交渉を行う。そのうえで利益を生む活動を実践する。

→何年かかけてここまで構築してきた。学校で販売の場所を用意するのがSTEP1。STEP2は販売する場所等を学生たちで検討しSTEP3は企業も自分たちで探す。今はSTEP3となっている。

Q カリキュラムポリシーに基づいて考えられているのか

→他の学校の取り組みや大学の取り組みを参考にしながら考えており、試行錯誤しながら進めていて4年目を迎える。

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

- ・みちのくココ・コーラボトリング株式会社 ・株式会社 Family Mart

【連携のアプローチはどちらからか】・・・企業・団体側

→過去の繋がりや卒業生が働いている企業からお声がけいただくこともある。企業側からの連携のお声がけは年間通して多くあり内容を精査してお断りするケースもある。提案いただいた内容については精査し、内容によって連携を様々な学科に割り振りすることがある。中には学科を横断するケースや自分が担当するビジネスのみの場合もある。

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・満足している

Q グループ評価と個人評価は別？

→特にそこまではしていない。全体の評価が個人評価となる。

Q ビジネスの場で情報をどう実践するか？活用させることはどうしているか？

→動機付けとしてはプロとして、企業と一緒に活動していくことを前提に動機付けをす

る。最初から成功するわけではない。失敗も経験という意識を持たせる。失敗したことについて、指摘するのではなく、失敗したことを責めるより、次どうしていくのかを試行錯誤していくことを考えさせていることの方が重要だと考えている。

Q 実際に失敗した際は？

→企業側からと教師側の両方からアプローチしてフォローする。（ケースバイケース）

【現在の産学連携授業について満足している理由】

・企画・提案・交渉・実践を経験し、さらに実利を伴った活動が出来ている点。教員が実行委員として新たな街のイベント「盛岡楽縁祭」の立ち上げに携わり、学生は複数の企業人で構成されたイベント実行委員会に対し、マーケティングの観点を絡めたブース企画や売上予測等をプレゼンし、許可を得た縁日を20店舗運営した。結果、数十万の利益を得てイベント内で最大の貢献を果たした。

→イベントに産学連携を取り入れ、様々な企画・販売をしている。運営は学生主体。

Q 利益はどうしている？

→学生に還元。元々は商売を経験させたいという思い。現金を渡すのは難しいので、学生達が喜ぶものを提供している。楽縁祭は初めてのイベントで1万人動員した。参加者は地域の方がメイン。元々の目標は5,000人。当日はテンヤワンヤな状態だった。参加者からは色々なお言葉をいただき、良いも悪いも含め勉強になったのではないかと考えている

【好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか】

・学生でありながら、複数の企業と同じ目的をもって本気で活動することが出来た点。失敗できない環境下でインプットした知識を活用した点。マーケティング、簿記、illustrator、販売士など

Q 良い事例？課題感？

→良い事例としては、先輩たちがイベントをやっている事を知っているからか、年々連携に前向きな学生が増えてきている。実際にファミマのSNSの広報をしたり、企画をしたりしている。学生自ら行っている点は評価している。あとは、JTも巻き込んで連携したりしている事も、水平展開している部分も評価している。

【さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か】

・学校外で継続した活動をするため、地域に溶け込んだ店舗などを学生向けに借りられるような仕組みや補助があると有難い

Q アンテナショップのようなイメージ？

→本当に企業連携をする際に、学校という意識をなくしていきたい。

店舗・ミーティングルームがあるだけで意識が変わってくると思う。

Q 実現の見込みはどうか？

→今は学校として、来年・再来年に向けて上記のような場所を検討している段階。

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

・成長ステップを考慮しながら、年間を通じて2～3回実践

Q 多いのか、少ないのか？楽縁祭に通じて？

→楽縁祭はたまたま。本来は、STEP1-3 に則り実施。STEP1-3 がそのまま回数となる。

【連携先の選定】

・双方にメリットがあれば選定の入り口はない

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

・教育方針、学生に学生らしさを求めないでいただきたいこと

→「教育方針」と「学生に学生らしさを求めない」ということを重要視している。企業様からお声がけいただいたときに、学生らしいアイデアを出していただきたいと言われることがあるが、学校サイドとしては学びの場として社会人の考え方、プロの視点を持ってほしいと思っている。

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

・目的、役割、スケジュール、双方のメリット・デメリット、リスク管理

Q 事例はありますか？

→例えば楽縁祭の例ですと、利益が出たらどうするか等、決まっていなまま進んでしまう事もあった。そういったこと（うやむやな状態）がないように、事前に企業様と様々なことはっきりさせた状態で進めていきたい。まだまだ勉強中です。

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いる

【産学連携に関わる学科の教員数】・・・2名（学科全員で取り組んでいる）

【担当教員の役職】・・・教務課長

【求められる「知識」を3つ】

- ・業界を横断する知識
- ・時事に関する知識
- ・地域に関する知識

Q 知識を深めるために取り組んでいることは何か。

→具体的にはないのですがアンテナを立てる。（新聞読む・ニュースを確認する等）

Q 横断する知識は？

→元々営業やっていたので、その際の知識・経験を活用していく。

Q 組織として何かあるか？

→このために何かがあるわけではない。

【求められる「技能」を3つ】

- ・コミュニケーションスキル
- ・事務処理スキル
- ・ビジネスマナー

Q 具体的な取り組みを教えてください。

→全専研主催や一般の研修の参加、学科内の教職員研修で学ぶ等。

【求められる「態度」を3つ】

- ・企業を理解しようとする姿勢
- ・変化に強く、挑戦しようとする姿勢
- ・学生の人的成長を考えられる姿勢

Q 取り組みはありますか？

→ビジネス課の教員はもう一人いるのですが、卒業生が行った企業を調べたり、他の学科が連携している企業を調べたりしている。とにかく、今の自分たちに不足していることを調べていく。

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ある

【担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ】

- ・コミュニケーション能力
- ・学生の人的成長を考える姿勢
- ・マネジメントスキル

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

- ・研修
- ・直接の助言

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・4

※1が最も低く5が最も高い

Q マイナス1の理由

→それぞれが別の連携活動をしていたり別の学年を担当していると連絡ミス等が起こっている。科目の引継ぎが出来ていない情報共有が出来ていないことがマイナス1の要因。

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

- ・日々のコミュニケーション
- ・スプレッドシートなどでいつでも同じ資料を確認できる

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ある

→管理職・就職支援の担当者と連携・支援がある。

【現在の連携体制】

- ・必要に応じて学科を横断してプロジェクトを組んでいる

Q 最近の事例

→楽縁祭にて、縁日はビジネス、パンフ等はデザイン課、HP はシステム課等の横断が出来ている。

【連携を推進する上で組織的な課題や、考える点】

- ・窓口を集約し、学科・グループ校を超えた連携になると良い

Q 窓口はバラバラ？

→学校毎に入ってくる話がほとんどグループ7校で統一の窓口があるとより良くなる。

【どのように事業評価をしているか】

- ・学生からのアンケート／ヒアリング
- ・連携先のアンケート／ヒアリング
- ・管理職による評価
- ・学生自己評価

→自己評価とリアクションという形で、分からなかったことや、何に躓いたのか等を忘れないようにアンケートをとっている。

→卒業研究として企業と活動する場合がある、最後にプレゼンテーションを行い、他の先生にプレゼンし評価してもらう。当然学科の先生の評価も入る。

【事業の評価規準は明確に設定できているか】・・・できている

【具体的な評価規準】

- ・課題を明確に捉えているか
- ・課題発見の根拠は説明できているか
- ・根拠はデータなどを用いて、客観的な視点で見ているか
- ・目的に対するアプローチは妥当か
- ・達成に向け活動に工夫はみられるか
- ・成果をデータで示しているか
- ・活動の成果はあったと言えるか

- ・活動の成果はあったと言えるか ※企業アンケート
- ・連絡手段などを工夫し、企業と関わりやすい環境を作ったか
- ・活動に計画性はみられるか
- ・学生側から提案または意見交換できているか ※企業アンケート
- ・企業接触時のマナー ※企業アンケート

Q 実際この通り評価できているか？

→実際に使った評価シートからの抜き出し。

Q 少し難しい評価もありますか？

→活動の成果はあったと言えるかという質問は、昨年度までは評価しづらかったと思う。今年利益が絡んでくるので、評価しやすかったのではないかと思う。

【評価規準は全職員（校内）に周知されているか・・・いいえ

→学科ごとに評価が違うから。プレゼンに参加された方に評価してもらったので、他の学科には公開していない（聞かれれば公開する）

【外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標】

- ・活動の成果はあったと言えるか
- ・学生側から提案または意見交換できているか
- ・企業接触時のマナー
- ・成果物または活動の満足度

→連携していた企業にもアンケートを実施していて、上記の回答をしている。企業様の評価にブレがなくなるように、ここまで出来ていたら、この評価というものを提示していて、それに沿って評価してもらっている。

【産学連携授業について改善の予定があるか】・・・ある

【産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか】

- ・基本的な活動の場を学外に設けたい
- ・教員と企業だけでなく、市や県の協力も図りたい

→アンテナショップのようなものを設ける。

Q 提案はしていますか？

→まだできていない。今後の課題。

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・成長できた
- ・働く意義を知れた

- ・大変だったけど、やって良かった

→意識が高い学生の一部は、上記のような回答をしてくれる学生もいるが全員ではない。
多くの学生から、上記のような回答となるように指導していく。

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・社内には無い新しい発見があった
- ・学生の教育にもっと関わりたい
- ・継続して活動したい

Q 地域連携や評価は重要だと思う、実際に上記のような意見がある？

→まだ少ないが、一部の企業様からは上記のような意見をいただいている。

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・次はもっとこうしたい

→今回は、企業様から指定があって準備したけど、次は学生に考えさせたいという声は自然と出てくれば、良いものとなっていくと思う。

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

- ・働く大人と関わることで、将来を考えるきっかけになってほしい
- ・働くことで誰かの役に立ったり地域の役割を果たしていることを実感してもらいたい
- ・それが楽しいと思ってもらえるのが理想

【必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか】

- ・コミュニケーション能力

→企業様は様々なプロである。そのプロの方々と色々な情報をお互いに共有したり、決めづらいことを決めなければいけない。企業様と交渉するためには、コミュニケーション能力が必要となる。

- ・学生の人的成長を考える姿勢

→先生方は学生達がかわいいので、先生が（失敗しないように）先回りしてやってしまう事もある。そこを我慢して待つ姿勢が大事だと考える。ただ、丸投げで待つのではなく、学生がこれを行えばこの力がつく、ということを考えて、この姿勢をもってやっていくことが必要。学生達にもやった感を持ってもらえるように考える姿勢が大切。

Q 実際に取り組みされて、先生の想定している人的成長を実感したか？

→起きているケースもあるし、思い通りにならないケースも多々ある。

Q 具体的には？

→本来の目的の「企業様とビジネスを成功させる」ことも大切だが、チームとして活動す

ることが重要と考える。例えば、チームの中で「あの子は全然参加してくれない」という不満が出た場合は、「どうすればよかったのか？」を徹底的に考えてもらった。結局その子たちが参加しない理由は、お互いの意思疎通ができていないからで、最終的にお互いに納得するまで話し合いを行って上手くまとまった。

・マネジメントスキル

→プロとしてスケジューリングを行うことは大切。スケジューリングを行う際に、予想外を想定することが大切。また、学生のメンタル支援もできる事も大切。そういう意味でマネジメントスキルは重要。

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

・現在どのような機会があるか

→職業実践の指定校なので必ず研修を受ける。全専研や一般研修に参加することを心掛けている。また、現在大学に通っていて心理学を学んでいる。これが業務に生きてくると良いと思っている。

・今後どのような機会を望むか

→企業様と学校側のマッチングフェアがあっても面白いと思う。

Q どういった情報が企業側にあると良いか？

→困っていることや何か新しいことをやってみたいという企業様はたくさんあると思うが学校には中々立ち寄りづらい。それを知り合う場があるだけで面白いと思う。

【上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→特にないです。当校の場合は、教務課長が先生を評価することはない。現在、評価制度を構築中です。

【（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→卒業研究の場で、必ず企業と絡んで利益を出す。最後のプレゼンの場を設けている。

【（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか】

・外部との調整用ツール

→チャットやスプレッドシートの共有、調整さんも使用している。※メールは使用せず

・成果物を共有・評価のためのツール

→スプレッドシートの共有。

【現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセス

や、技術習得など) 以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

→知っていることと出来ることが違うと感じる場。働くというイメージが変わる。イメージ転換が必要だと感じる。検索すれば、何でも知識が得られる時代で、今の学生達は失敗したくない思いから、先行して答えを検索してしまう。しかし、重要なのは、答えがないものは失敗しながら経験を積んでいくことだと考えている。

○国際総合学園（新潟県）n c c新潟コンピュータ専門学校

調査日：令和5年11月20日（月）16：00～17：30

調査方法：委員2名によるオンライン調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

- ・学科名・・・キャラクターデザイン科
- ・目標・・・XR 先端技術の実践
- ・時数・・・60 時間

→1年生は実務的なことはやらないが知識ベースで学習し、実務的に関わるのは2年生以降。60時間という時間数は妥当。案件によってはもっと短い案件もある(30時間)

【産学連携授業を実施している内容】

- ・XR コンテンツの制作と5G環境下での実装作業（デバイスでの可視化）

→メタバースに関する取り組みを学校としては2022年から開始

無線の状態で、メタバース空間でできることを表現できないか(特に屋外)その実証実験を企業と取り組んだ

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

- ・NTT ドコモ
- ・株式会社ドコモビジネスソリューションズ

→過去の連携実績はなし

授業で使用するツールを購入等していた就職実績としてはあり

【連携のアプローチはどちらから】・・・学校側

→定期的にイベントに学生の作品を出展

新潟市の情報発信を担う(Vtuber を用いて)

新潟市が5Gの実証実験をすることになり、企業と学校、自治体のタイミングが合った

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・大変満足している

→点数で表現すると200点

【現在の産学連携授業について満足している理由】

・企業との連携で新潟市のXR事業に参加することができた。

これらの実績で学生の内定、学校のPRに繋がった

→XR事業をやりたがっている県内ではトップクラスの企業に内定

5G関連イベントの現場スタッフの学生が現地でスカウトされた

【好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか】

・企業との連携で先端技術に学生が触れ、それを若者が活用する事で企業も新しい発見があったそうです。双方にとって得るものが多かった。

→採用実績も含め、WIN-WINの関係を作れた。現在も新規案件に取り組んでいる

ドコモとは現在も特別授業等で継続して繋がっている

【さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か】

・産学連携の実証実験、プロトタイプ制作を世に知ってもらう広報支援、発表できるイベントがあると良い

→今月(11月)に新潟市主催イベントとして、県内企業の新たな取り組みとして発表の機会を得る ※新潟市とは教育連携を結んでいる

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

→2年前期から卒年次の前期。企業連携による実習体験、制作参加による実績作りのため

→1年前期 企業からの説明会(前期3回、後期3回最低でも企業が登壇)

→2年前期 制作開始→3年 実績作り

※オンラインの活用により授業参画の回数は増え、学生も質問しやすくなった

【連携先の選定】

・教員によるネットワーク開拓

→連携がうまくいかなかったケースとして複数企業からの同時依頼や、連携に慣れてい

ない企業からの依頼は教育現場への理解の薄さからお断りすることもあった。

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

・双方にとってのメリット、学生の到達ポイント、予算

→到達ポイントについて、

・ここまで到達できれば良い、という到達ポイントを設定する

・求めるクオリティによってスケジュール調整をする

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

・コンテンツのボリューム、制作物のべ切、双方のメリット、完成度

→学生主体ではあるが、ディレクションは教員メインでコントロールしている

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いる

【産学連携に関わる学科の教員数】・・・6名

→多ければ多いに越したことはない

【担当教員の役職】・・・教務部長、学科長

→グループ全体でも同じように学科のリーダーが取り組んでいる

【求められる「知識」を3つ】

- ・PC・デバイス知識
- ・CG アプリケーション知識
- ・各種データ形式の知識

【求められる「技能」を3つ】

- ・制作スキル
- ・マネジメントスキル
- ・コミュニケーションスキル

→技能を高める取り組みとして、先端技術のコンテンツが多いため0から組み立てる経験をしてもらう。企業と学生の間で立って理解を促進するコミュニケーションをしてもらう。学生向けのマネジメントが必要

【求められる「態度」を3つ】

- ・先進的な技術やデバイスへの関心
- ・情報収集
- ・礼節・感謝の気持ち

→取り組んでいることとして、技術やデバイスは興味がないとできない。その興味が情報収集にも繋がることで提案にも活かされる

※情報収集することで、連携企業の選定にも活かされる

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ある

【担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ】

- ・先端技術、モードへの関心、日々の探求心、勉強会や研究会への参加を通じて外部の方と交流をもつ
- ・交渉力
- ・コミュニケーション力

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

- ・ 研修
- ・ 授業時間の調整
- ・ 直接の助言

→学内や外部の研修を活用

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・5

※1 が最も低く 5 が最も高い

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

・ 進捗状況に合わせて上長に報告、情報共有。上長も随時アドバイスする。状況によっては上長、学校長も打ち合わせや交渉に参加する

→進捗管理をする上で、話が大きくなりすぎてしまい、現場レベルではどうしようもない話になってしまったことがある(ドコモ社長×グループ代表)

学生の学び場の提供のはずが、企業レベルでの取り組みになってしまったことがある

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ある

【現在の連携体制】

- ・ 担当者（学生指導、企業との窓口）・上長（指導内容の確認・指示）・学校長（確認・最終承認）

【連携を推進する上で組織的な課題や、考える点】

- ・ 担当者のスキル向上、底上げ

→昨年から生成 AI の研究や取り組みを実施。そのためのスキルアップをしていかなければならないため、外部の研修等に積極的に参加してもらっている

【どのように事業評価をしているか】

- ・ 連携先のアンケート／ヒアリング
- ・ 外部の有識者からの評価、管理職による評価

→アンケートや感想の取りまとめは必ず行う(学校、企業双方)

外部の有識者として、教育提携している企業にも事例紹介をし、評価を受けるグループ全体の統括にも評価をしてもらう。具体的な評価基準としては点数評価(5段階)を実施

【事業の評価規準は明確に設定できているか】・・・できている

【具体的な評価規準】

- ・ 外部評価による評価／連携企業・クリエイターによる作品評価は、成果物の採用、展示出展を評価規準とする

→各教員で目標設定している。カリキュラムと連動し学校、企業評価がそれぞれにある。

【評価規準は全職員（校内）に周知されているか】・・・はい

→担当教員ごとに上長からのフィードバックを行っているため評価基準は浸透している

【外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標】

・連携企業・クリエイターによる作品評価は、成果物の採用、展示出展される。世に公表する事を評価規準、達成目標とする

【産学連携授業について改善の予定があるか】・・・ある

→学生が増えると職員も増えるため、新たに入った方が早期に連携授業に慣れることができる環境が必要。企業が実施する勉強会になるべく多く参加することが重要。教員の理解が進んでいない状態での連携は危険。授業だけではなく、学生募集広報の視点からアウトプットする力が必要。

【産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか】

・新任教員のスキル向上、全校での産学連携への推進

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・企業との連携を通じて、企業が求める人材、知識・技術を学べる
- ・体験出来てよかった
- ・自分が作った物が展示されて嬉しい
- ・作った物の出展が楽しい

→前期学生アンケート内容を転記

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・専門性を学んでいる学生さんと関わって良かった
- ・若者のアイデアで新しいコンテンツが創出された

→企業アンケートから転記

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・企業、学生と共に先進技術を学び、知識と技術のアップデートとなる
- ・教員として常に最先端、企業の現場を知る事は重要である。

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

- ・通常授業では学べない、実践力や現場の雰囲気を経験する。
- ・産学連携授業を通じて、社会に出るための実績作りや自信を養って欲しいです。

【その他】

→知識はいつでも得られるが、それをどう学生に伝えるか、企業とのパイプを作れるかが

重要。教員は補助輪のような役割であり、常にバージョンアップをかける必要がある

→行政との連携はあるか？

産業振興課との連携が多く、そこから企業を紹介していただくことが多い

→先生の経験から、若い時にあったらいいなと思うことはあるか？

世代ごとの価値観に合わせられるスキルがあると良い

→分野を越えた産学連携はあるか

メタバース空間での工場見学イベントで、声優業を学ぶ学生にも参加してもらったグループ内にあるサッカーチームを応援するコンテンツ(Vtuber をチアリーディングの方が担当)

→コミュニケーションが難しい学生に対する指導の配慮等はあるか？

イベントや企業連携をする際、まずは導入として説明会や先輩の様子を見せることで雰囲気づくりをするようにしている ※慣れさせる

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

・現在どのような機会があるか

→研修への参加促進

・今後どのような機会を望むか

→引き続き企業や行政と連携して学生にチャンスを与えていきたい。予算の確保

【上記の(教員の) 資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→各教員が目標を立て、前期後期でフィードバックを実施している

【(具体的な事例について) 外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→作品が採用されるかどうか

学生が小学生に講義をする＝理解ができているという評価

世の中に学生が関わったことが実績として出るかどうか

【(好事例について) 効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール(デジタル・アナログ)がありますか】

・外部との調整用ツール

→ケースバイケースなため、特に決まったツールはない※企業に合わせて全て使う

・成果物を共有・評価のためのツール

→各案件で臨機応変に行っているため特定のツールはない

【現状の取り組みについて実感している価値(学校でフォローできない情報へのアクセス

や、技術習得など) 以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

→インターンシップ等でイベント参加すると学生へ個別でのアプローチがある(学校でフォローできない)。そのような新しい動きに対してどこまでフォローできるか。新たなものをどんどん活用することで成長してほしい

○穴吹学園 (広島県) 穴吹ビジネス専門学校

調査日 : 令和5年11月21日(木) 16:00~18:00

調査方法: 委員2名による対面調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

- ・学科名・・・ITビジネス学科:2年制(1年生30名・2年生20名)
- ・目標・・・情報活用人材の育成
- ・時数・・・60時間

→全て1年次に実施。通常授業で企業が授業に入って実施

【産学連携授業を実施している内容】

- ・提携先企業のITリテラシー活用事例の研究

→ITパスポートの分野。座学+ワーク 企業事例を元に説明

マネジメント、資源管理、スケジュール管理の方法

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

- ・株式会社笑幸物産(地域の野菜をネットで販売、小規模店舗販売している)

もともと非常勤講師の方が講師としてお越し頂いていたところに依頼

開始時期は職業実践として記載したのは昨年度から初年度:青山商事(ビジネスマンとしての講義)

【連携のアプローチはどちらからか】・・・学校側

→12月にアプローチ。基本的に学科長から

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・満足はしていない

【現在の産学連携授業について満足していない理由】

- ・幅広い職業分野を目指す学科のため、連携協力先の企業数を増やしたいが、その協力がまだ得られていない

→現在は1社。希望は毎年違う企業と行いたい。現在の企業だけでは限定的。広い職業分

野を目指す学科なので、もうちょっと学生に職種の幅を広げてもらいたい。

【課題解決や改善のためどのような方法があると考えますか】

- ・地域産業界との関係をより深め、商工会や物産協会等の支援を受け、様々な連携・取り組みを構築する

→今後、商工会議所に協力いただける可能性がある。行政の協力があれば助かる。

【課題解決や改善のために校内外の支援があるか】

→校内を横断した動きを今後していきたい

デザイン分野がうまくいっているので、他の学科に繋げていきたい

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

- ・1年前期・後期の1年間、演習として

→時間数を増やしたい。2年生は就職活動のプラスアルファになる。学科の中心の内容はスキルが追いついていないが1年生でやっておきたい。現状うまくやるのは2年次。

【連携先の選定】

- ・前年度（またはそれ以前）からの引継ぎ

→スタート時から変わっているが、そんなに大きく変わっているわけではない

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

- ・企業連携協力の必要性

→企業にメリットを伝えること。ウィンウィンの関係でないと、ただのボランティアになってしまう。就職は市外が多いので、これからの人材不足から、その分野で活躍できる人材を養成する必要があるという説明が必要。

- ・カリキュラムポリシーの伝達

→学校で作成したもの（カリキュラムブック）を提示している

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

- ・達成目標の伝達や平等な指導の依頼、評価基準の設定：

→学科長が担当

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いる

→教務部長、学科長、産学連携室

【産学連携に関わる学科の教員数】・・・2名

→学科担当（常勤）、ITビジネス学科 適正な人数だと考えている

【担当教員の役職】・・・教務部長

【求められる「知識」を3つ】

・分野の専門性：

・業界の動向：

・地域産業界の動向：

→様々な企業と繋がることで得られると考えている

【求められる「技能」を3つ】

・多段思考力

・調整力

・問題解決力

→技能を伸ばすための取り組みはない。普段の業務で考えてもらっている

【求められる「態度」を3つ】

・共通の目標に向かって努力しあう姿勢

・誠実さを表す態度

・即効性を求めず長期的な目標に向かって努力する姿勢

→学科長に伸ばしてほしいところ

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ある

【担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ】

・多段思考力

・調整力

・問題解決力

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

・人員配置の考慮：担当教員になってもらう人の人選

・直接の助言

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・3

※1 が最も低く 5 が最も高い

→マイナスの理由:自分自身が把握していなかったから

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

・毎授業終了後、連携先担当者への進捗ヒアリングを行い、次回授業計画を練る

→実施した内容に学生がどう反応していたか、反省会のようなものを実施している

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ない

→これからやっていきたい。

【どのように事業評価をしているか】

- ・学生からのアンケート／ヒアリング
- ・連携先のアンケート／ヒアリング
- ・外部の有識者からの評価・管理職による評価

→学校関係者評価委員会。部長、副校長。

【事業の評価規準は明確に設定できているか】・・・まだできていない

【外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標】

- ・打合せ時に設定した科目評価基準以外のものはなし

【産学連携授業について改善の予定があるか】・・・ある

【産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか】

- ・連携協力企業数を増やし色々な業種・職種における産学連携を取り組んでいきたい

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・「授業を通じて、実際の課題に対処する方法や問題を解決する力が身についた」という問題解決力の向上意見
- 学生アンケートより抜粋

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・「業界を目指す方へ未来への投資として教育に関わり、新しい才能を育てる機会となり良かった」という人材育成に対する評価意見

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・「授業を通じて教員も専門知識を共有して実務経験を積み、学生に示唆的な指導を提供することが出来るようになった」という教員スキル向上の意見

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

- ・実際の業界や職場での経験を授業の中で提供し、将来のキャリアに向けた方向性を明確にすることができるスキルや職業適性を身につけさせたい
- 1年生でやることの目的だと思っている

【その他】

Q. 行政との連携があるか

→これから。地方は行政と関わらないと難しい

Q. こんな研修、講座があったら良かったなと思うもの。

→企業と関わる機会。懇親会みたいなものでもいい

Q. コミュニケーションスキルが難しい学生に対してのサポート

→就職指導、外部の企業様と関わる機会、個人的にサポート教員からの指導。別枠での取

り組みはやっていない

【必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか】

多段思考力・調整力・問題解決力

→学生と企業の間で立って、指導員としては企業の方と結びついてコンセンサスを取りながら、企業にうまく伝えていく力が必要

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

・現在どのような機会があるか

→全専研の研修。学校では、年間の必須研修時間が最低 15 時間ある。（専門研修も時間数に含めて OK）

・今後どのような機会を望むか

→企業と関わる機会。懇親会みたいなもの

【上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→ない。業績評価のみ

【（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→学生アンケートが中心

【（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか】

→学科としてはない。他の学科は Slack を利用している。

・外部との調整用ツール

→Slack

・成果物を共有・評価のためのツール

→成果物の共有：作品集（冊子）を毎年度作成し、企業に渡している。

企業からは賞状を頂いている。

【現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

→学生の成長として感じるもの：学生が地元のことを知らない。地元こんな企業があるんだと知ることがある。それが今後の職業選択に活かしている。例）造船業：ホテルなど他業種展開しているなど

○つくば総合学院（茨城県）つくばビジネスカレッジ専門学校

調査日：令和5年11月22日（水）16：00～17：30

調査方法：委員2名によるオンライン調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

・学科名・・・ビジュアルデザイン学科（グラフィックデザインコース・マンガイラストコース）

Q. ビジュアルデザイン学科の学生人数は

→現在100名程度（両コース2学年合わせて）

上記学科に加え、プラス1年の研究課程を作って10年目を迎える

入社後、学生数が増えている

Q. 就職先はどうか

→業界への就職がなかなか難しい

・目標・・・地域団体より依頼されたデザイン物の制作を、クライアントの意向に沿って市場での使用に耐えうるレベル（デザイン事務所と同等のレベル）への昇華

Q 産学連携の形は、学校に依頼がきたものを中心に実施している？

→基本的には企業から依頼があった依頼物を作って、それを納品している。

研究課程については、自ら持ち込む形をとっている。

Q 研究課程の形態はどのような形？

→学校推薦枠5名（内部進学用）、一般枠5名の計10名定員で構成。

学校推薦枠は学費免除があり免除が得られない学生が一般枠で研究課程に進む場合も。

特にマンガイラストコースについては、編集者との密な関係の構築のために研究課程を選ぶ学生も多くいる。実際に漫画を学ぶのには2年では短い。茨城県内のライバル校では3年制の学科があるが、3年制はややハードルが高い。そこで自校では2年から入り、必要に応じて研究課程に進んでいく形をとっている。

・時数・・・通常のデザインワーク内で案件のボリュームに合わせて臨機応変に対応

Q 年度によって時間数はバラバラということでしょうか？

→ここ数年で、大体毎年依頼されるものが固定されてきた。固定されているものは大体スケジューリングできるが、新規の依頼についてはその都度検討し適切に配置している。依頼の受け入れは、案件のボリューム・レベルを見極めて適切なタイミングに配置。依頼を受けることによって本来やるべきことがやれなくなることもあるが、コミュニケーションをとったり、非日常な時間帯を過ごすことで、実力がつくと思っている。

【産学連携授業を実施している内容】

・主に地域団体から依頼のポスターデザインやキャラクターデザインを中心とするデザイン案件。また、広義でのデザインに関わる相談を受けての企画提案など

Q 企画提案までやるのですか？

→企画提案を行うのは研究課程が対象となっている。

Q デザイン会社と同じレベルのデザインをしようと思うが報酬についてはどうしているか
→基本的には学生の学びの場をいただきたいというスタンスでお願いしている。実際にプロに頼むような質の担保と、時間に関すること（スムーズにいくとは限らない）を伝えた上で依頼を受けている。特に、地元の田舎ですとデザイン会社が無い（印刷会社にデザインをお願いする等）、デザインの質があまり良くないといった中で、依頼先の選定に企業も困っている。また、長年やっていると毎年同じものになってしまったり、自分たちでデザインをやらなければいけない等の問題を抱える企業もある。実際に依頼を受ける際には、報酬というわけではないが、学校名、学科名、学生名のみ入れてくださいとお願いをしている。学生達に対しても、作品に名前を入れることはなかなかの事を理解してもらい、それが報酬の代わりとなっていることを伝えている。それでも企業側様から報酬を頂ける場合は、クオカード等で提供してもらう。もちろん、企業によっては現金でいただけることもある。報酬をいただけた場合は、全て学生に還元している。

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

- ・茨城県土浦市スポーツ振興課
- ・茨城県土浦市広報広聴課シティプロモーション室
- ・茨城県牛久市教育委員会文化芸術課
- ・茨城県牛久市教育委員会スポーツ推進課
- ・かすみがうら市歴史博物館
- ・福祉支援施設東京空色株式会社
- ・株式会社サイドランチ
- ・株式会社不知火プロ 他多数

Q 多くの連携先企業がありますが、どのように集めているのですか？

→最初の出だしは「茨城県牛久市教育委員会スポーツ推進課」からの依頼から。卒業生が関わっていたマラソンの関係で、学校を紹介してもらい話をいただいた。結果、高評価をいただき継続し今に至っている。また、同団体の違う部署からの依頼（茨城県牛久市教育委員会文化芸術課）もきている。現在は上茨城県土浦市スポーツ振興課、茨城県土浦市広報広聴課シティプロモーション室、茨城県牛久市教育委員会文化芸術課からの依頼が多くなっている。時間の経過で口コミが広がっていき、各所から相談受けるようになっていった。長くお付き合いさせていただいているものほど、どのタイミングで実施すればよいかを想定しやすくなっている。上記の他にも学校発信の企画モノが2つほどある。（研究課程案件）ただ、連携企業が少し多くなってきているのも事実で、どこかで整理するタイミングだと考えている。基本は拒まずに依頼を受ける。場合によってはクラス全体ではなく、一部の学生でプロジェクトを組んで受けた依頼をこなすこともある。

【連携のアプローチはどちらからか】・・・企業・団体側

→企業側からのアプローチが多い。今は、研究課程のアプローチを新たな試みとして取り入れたもの実施している。デザイン思考を取り入れ、ヒト・モノ・コトをしっかりと考えながら取り組むようにしている。例えばどこそこの〇〇公園があり、どうすればその公園をより良くしていけるかを考える場合、キャラを作って、企画をして企業側に持っていく等を実施。地元でこういうデザインする学生達がいるという繋がりを持たせていく事を目的としている。また、メディアに取り上げられれば学校の広報にもつながると考える。

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・大変満足している

→依頼を受けて作成された制作物は広報にも使えるし、学生のモチベーション向上にもつながっている。我々が行っている産学連携は選ばれるのは一人しかいない。例えば、ビジネス系で国家試験を受けたら一人しか合格しないというのはなかなかなく、多くの人が合格するはずである。それとは違い、企業に選ばれるたった一人になることをモチベーションとしている。指導する先生たちも多くの経験をすることで引き出しが増えていく効果もある。

【現在の産学連携授業について満足している理由】

- ・学生の成長を実感できる
 - ・学生の取り組み意識が高まる
 - ・学生の責任感を刺激できる
 - ・実際の仕事を体験できることや、その実績による他校との差別化が図れている
 - ・採用学生の本人はもちろん、ご家庭も喜んでくれる。また、採用に至らずともクオリティの高いポートフォリオの助けとなる作品を生み出せる
 - ・クライアントの評価が高く、それによって次年度の依頼につながったり、他部署への紹介など、次に繋がる実績を生むことが出来ているため思わぬ口コミ効果も生まれている
- 実際に、学生達がモチベーションを下げないで取り組めるかどうかは、先生方の腕前にかかっている。色々な学生がいるなかで、選ばれた学生だけでなく選ばれなかった学生達についても、それぞれをしっかりと見てあげる。例えば、出来上がった作品に対して、「こんなアプローチを考えたんだ」とほめてあげる、学生達の評価と企業側の評価が違うこともあり、それもモチベーション向上に還元させるような声掛けを行うなど

【さらなる充実のためにどんな校内外の支援が必要か】

- ・現在の状況では、それらに割く時間を用意することが難しいほど案件が多い。そのため1・2年生でなく、さらに上のデザイン研究課程にその時間を見い出す取り組みをしている
- 本来、専門学校は2年制ですので、2年の中で企業連携をやらせていきたいと思っ

るが、毎年、質・レベルが上がっているのので、入学する学生達は大変になっている。だからこそ、研究課程を作ることで、安心できる時間の確保に繋がっている。

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

・案件のレベルにより1年後期か2年次で対応。主に2年前期が多いが臨機応変に対応→ある程度（レベル）の作品として形作れるのは2年生の後期になる。最低でも1年生の後期から。案件によっては、1年生に頼むのは厳しいという事もあるので2年生に任せることも。2年前期で厳しい案件は、先生方のテコ入れをすることもある。

【連携先の選定】

・上記は全て当てはまるが、受け入れは教務部長の経験から判断している

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

・目指す取り組みに対する「想い」を明確に伝えている

→連携先から依頼される場合も持ち込む場合も、なぜこの案件を受けるのか、持ち込むのかを明確に伝えていく。実際に制作するのは学生でプロではないということ。企業様から学びの場を提供していただくという認識を共有していただくことが重要だと考えている。ただ、実際に市場に出回るものなので、先生がなんとかしますという覚悟で取り組むことを伝えている。先方もただ依頼するだけでなく、学びの場を提供しているという役割を担っていることを意識してもらおう。

Q連携先への就職については？

→当校では、地方公共団体からの依頼が多く、そこに就職するのは難しい。ただ、一般的にデザイン系の学生達はポートフォリオを作るので、そこには役立っている。実際のところ専門学校生の作品なんてたかが知れている。何故ならば、大体どの専門学校でも教える内容はほぼ一緒だから。企業側のスタンスも入社後3か月で育てていくという意識が強いのが実情。だからこそ、普通のデザイン系の専門学校で学んでいることだけではなく、この企業連携を通して、実際の世に出る作品を作ってきている事が強みとなる。就職内定直結ではないが、他のデザイン系の専門学校の学生のポートフォリオより、当校の学生のポートフォリオの方が質が高くなっていると感じる。

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

・案件により異なるため一概には言えない

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いる

【産学連携に関わる学科の教員数】

・窓口は1名で、案件内容に相応しい講師に依頼している。主に2名が中心

【担当教員の役職】・・・教務部長

【求められる「知識」を3つ】

- ・領域に対する知識
- ・領域に対する経験
- ・柔軟な対応力

Q個人・組織で伸ばしていくものは何かあるか

→先生はどこかから知識を吸収しなければいけない。しかし、専門学校は最前の現場ではないので、最新の知識を得ることが難しい。産学連携はファシリテーション能力も必要。これを学ぶのは難しい。自分は働きながら大学に行っていたので、そこで学んだ。ビジネス系の先生は資格を取得させる。そこには明確な答えがあるので、そこに向かった指導をすれば良い。しかし、デザイン系の先生の場合はそうではないと考える。生徒が10人いたら10人それぞれにまずは拡散的思考を理解してもらい、その後、集約的思考に変換していく必要がある。デザイン系の先生はそういう能力を自然に学んでいると思う。それを養うために、高校から依頼される体験授業等（他流試合⇒高校で授業をしたり、OCの体験を考える）をしていかないと、なかなか養われないのではないかと考えている。

Q現在先生は何人態勢？

→デザイン系の先生は4名。1名は十分に能力はあるが、残り2名はまだ経験不足の状態。

Q新人が入ったりする？

→小さい学校なので出入りは多くない。実際に学生数が増えても不安が多いのが現状。今、この大変な経験を受けておくことで、将来の自分にとって有用となるという姿勢が大事。

【求められる「技能」を3つ】

- ・コミュニケーションスキル
- ・あとは案件により異なる

Qコミュニケーションスキルは、学校で場を提供することはある？自己開拓？

→企業から依頼があったものをこなす。企業様の繋がりで紹介があったり、研究課程の企画等を行うことで得られると考えている。

【求められる「態度」を3つ】

- ・新しいことにワクワクできるか
- ・デザイン思考を持っているか
- ・全体を見渡せるか

→この3つの態度は担当する教員にとって必須。新しい案件は怖い、明確にできるか分か

らないことを受けるのは怖い。その中で、ワクワクの気持ちがないといけない。ワクワクが潜んでいないと受け入れに抵抗があり即決できない。やらなきゃわからない。全体を見渡せる力が必要。本校で出来ることはここまでですとしっかりと伝えることも必要。

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ある

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

- ・人員配置の考慮
- ・授業時間の調整
- ・直接の助言

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・5

※1 が最も低く 5 が最も高い

→先生方には、ちょっと無理をお願いしている案件もあるが、しっかりと把握できている。

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

- ・実際に関わる。もしくは直接の担当者と細かな話し合いをする

※案件に関する無駄話・おしゃべりを含む

→自分の求めているレベルをしっかりと伝える（学生の動きも含め）ことが重要。

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ない

Q 学科を超えた連携は？

→やりたいが、無理という意見が多い。デザインだからできるという偏見も多い。他学科との連携については、時間の制約や各学科が自分たちの学科を一番に考えているため実現が難しい。実現のためには、土壌の醸成が必要。

【どのように事業評価をしているか】

・管理職による評価・学生からの評価は、進級時と卒業時の学校・担任満足度アンケートによる。企業からの評価は、その企業との案件が修了した後での成果や評判を受けての事後の交流において

Q どれくらいの頻度で評価を行っている？

→年1回くらい。産学連携の満足度調査をしているわけではない。通常の人事評価や、全校で学校満足度アンケートが一つの評価となっている。企業様の評価については、アンケート等は実施しておらず、修了後のお話の中を多くいただくことや、お礼メールの内容、継続して依頼をしてもらうことは良い評価と考えている。

【事業の評価規準は明確に設定できているか】・・・まだできていない（ほしい）

【外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標】

・明確な評価基準はないが、次年度への継続依頼はひとつの評価だと受け止めている

【産学連携授業について改善の予定があるか】・・・ない

→案件を整理していく過渡期のフェーズに入ってきた。今後は卒業生を登録制にして、依頼を回す形ができればよい。

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

・モチベーションの変化

Q どういう場面で知ることになりますか？

→アンケートや、個別に話をしているとき、他の先生経由で聞いたりする。

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

・依頼案件がどのような役割を果たし、どのような評価であったか

→依頼をいただいた担当の方から、大体こんな感じでしたよという言葉が多くいただいたときに高評価だったと思う。言葉が少ない場合は評価が高くないと思っている。

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

・指導した学生たちがどのような成長を見せていたか

→終わった後に学生達にヒアリングする。

良い・悪い、含め、どんな成長があったかを伝えてほしい。

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

・モチベーションの変化

・成長の実感

・自己肯定感の向上

→上記の他に、学生達が持っている能力が社会的貢献していることを実感してほしい。ただ単にキャラ作りをするだけではなく、社会的にどう貢献しているのかを実感することが大事。特に担当している学科は、単なるお絵かき学科という印象を持たれることも多いが、自分たちの制作物が、どう社会的な貢献をしたのかを学生に気付いてほしい。

Q 著作権はどうなっている？

→ポスターデザインはご自由に使ってくださいというスタンス。

ただし、学校名、学科名等は入れさせてもらう。企業・学生両方に了承を得ておく。キャラクターもご自由に使ってくださいというスタンス。ただし、事後に収益事業となった場合はご相談くださいと伝えている。先にも話しましたが、報酬としてはデザイン料・原稿料はクオカード等で提供してもらう。ただし、著作人格権は手放さないように心掛けている。また、学生が卒業後も、お仕事をくださいと伝えておく。現在は口約束程度だが、今

後は契約書を用意することも検討。

【必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか】

→着地点を見出すためには、これが必要と考えたため。依頼に対して責任を持って受ける場合、着地点を見据えて判断するにはこの能力が必要と考える。

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

・現在どのような機会があるか

→難しいですね。5年後くらいに分かることだと思うが、後輩が自分の背中を見ていくのが学びの場と考えている。

・今後どのような機会を望むか

→他校の意見を聞く場。成功事例だけでなく、失敗事例も含めて、事例発表を聞く機会や情報交換（新たな取組等）をする機会があると良い。

【上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→他の先生の評価は明確な基準は今はないが、振り返ってみると、「常に情報共有しているな」、「肝を外してないな」ということを意識していると思う。今回のヒアリングの機会が考える良い機会となった。まだ言語化できていないが、今後検討していく必要があると考える。

【（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→明確にはなっていない。事後にいただいた話を他の先生と共有している。

【（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか】

・外部との調整用ツール

→メールと電話がメイン。

・成果物を共有・評価のためのツール

→成果物を持参する場合はしっかりと紙で持っていく。その際、各成果物のポイントを裏に着けたりして、学生達の作品に込めた思いがしっかりと伝わるようにしている。また、持参した際に企業が選定するための判断へのアドバイスも行っている。

【現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

→実際のお仕事ができることが一番大きい。第三者の存在を意識することを分からせる

ことに一番価値があると感じる。漫画・キャラクター制作は趣味の延長や、スキの延長となり作品が自分本位となりがち。そうではなくこれをしたら人は喜ぶ、動くというデザイン思考が重要。そういった意味でもこの産学連携という言葉が非常にしっくりきていると感じる。

○有坂中央学園（群馬県）専門学校 中央情報大学校

調査日：令和5年11月24日（金）10：00～12：00

調査方法：委員2名による対面調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

・学科名・・・ポップカルチャー学科（学科設立から約3年経過）

→1年生18名・2年生34名

・目標・・・動画編集スキルの習得

・時数・・・60時間 →アクターエフェクト中心ではあるが、妥当な時間数

【産学連携授業を実施している内容】

・映像編集に必要なソフトウェアである「Premiere」「AfterEffects」の操作を習得する

→学内に上記操作指導を行う教員はいない

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

・インターメディアサービス

→伊勢崎の企業（連携歴としては10年以上のお付き合い）

【連携のアプローチはどちらからか】・・・学校側

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・満足している

→点数を付けるとすると100点満点。カリキュラム編成でご無理を言っている中で対応してもらっている。学生の成長もしっかり確認できる

【現在の産学連携授業について満足している理由】

・動画編集の授業を長く続けてもらっており、発表イベントにおける課題提出を確実に実施してくれる

→信頼関係が構築できている 非常勤のような形式

→2月に実施するイベントで授業の成果発表を実施

【好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか】

・学生たちがソフトウェアを自由に使いこなすところを見たときにスキルの

上達を認識し評価できた

→ツールを最大限に生かすため、幅広い視点からソフトウェアの使用方法を指導してくれている

【さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か】

・学科全体で授業をするには、授業の必要性を疑問に考える学生がいるため、できれば専攻単位で授業を行いたいが、コスト面で難しいので学科単位での実施となっている。最適な授業を担当してくれる企業を見つけるのが難しいと感じている

→イラスト、CG、ゲーム、アニメーションという専攻に対し、全てに共通する連携ができていない。職業実践として最適かと問われると疑問も残る

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

・2年前期の映像編集応用Ⅰ、1年前期の映像編集Ⅰについて全ての授業コマを企業の方に担当してもらっている

→企業は授業運営も業務内容に位置付けて活動してくれている

【連携先の選定】

・前年度からの引き継ぎ

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

・授業のゴール設定と、この授業を受けることで専門分野の就職をさらに希望してもらえよう授業をして欲しい

→毎年専門分野への就職率としては高く20%。受験してもなかなか内定を取れない

→実写合成ができるようになることをゴールとして設定

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

・学生の特徴とスキルレベルの確認

・最終課題のレベル設定について

→個性や特性が多様化しているため、写真ベースで学生の特徴を説明している

→業界標準に到達することを基準とはしている

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いる

【産学連携に関わる学科の教員数】・・・1名

→インターメディアサービスとの連携をしているという点では1名

【担当教員の役職】・・・デザイン教育課課長

【求められる「知識」を3つ】

・学生のスキルレベルの把握

- ・一般的な思考
- ・スケジュール感を認識している

【求められる「技能」を3つ】

- ・コミュニケーションスキル
- ・提案力
- ・調整力

【求められる「態度」を3つ】

- ・何事にも挑戦する姿勢
- ・協調して物事を進める姿勢
- ・何とかする姿勢

→特に何とかする姿勢が重要

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ある

【担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ】

- ・ヒアリングを通して実際に何をするのが正解なのかが提案できる能力
- ・絶対にやり遂げると言う何とかする能力
- ・まずやってみると言う挑戦する気持ち

→これまでの回答と同様

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

- ・研修、面談
- ・人員配置の考慮
- ・授業時間の調整
- ・直接の助言
- ・働き方の改善指導

→研修については全専研等を活用

→担当教員が各教員のスキルレベルを把握し研修を組み立てている

→自分よりもスキルが高い教員に対して、学生への接し方や伝え方、学生への傾聴度合についてアドバイスをしている

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・3

※1が最も低く5が最も高い

→週間授業報告書を活用しており、週単位では把握している状況

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

・把握、管理は適度が望ましいと思う。あまり口を出し過ぎると、逆に思ったような行動ができなくなり、精度が落ちるため

→気持ちよく学生が授業を受けられることが重要

→連携企業を増やしていく必要性は感じている。一方でそのような企業が見つからない

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ある

【現在の連携体制】

・各科目の分野ごとに担当職員がいるので、企業の方とはその職員が連携をとっている

【どのように事業評価をしているか】

・学生からのアンケート／ヒアリング

・外部の有識者からの評価

→学生アンケートは決まった項目がある(半期に一回振り返りのアンケートを実施)

→教育課程編成委員会にて実施

【事業の評価規準は明確に設定できているか】

・できている

【具体的な評価規準】

・課題提出などの平常点や出席率及び期末課題の点数を考慮して評価を行う

【評価規準は全職員（校内）に周知されているか】・・・はい

【産学連携授業について改善の予定があるか】

・ある

→アニメーションはできそうだが、3DCGやゲームについては中々前に進めていない

【産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか】

・授業科目の変更と連携企業の変更を検討中。現在の連携科目は学科全員が受講するにはレベルが高いため、選択科目に変更するので別の科目を検討している

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

・動画編集に興味を持てた

・このスキルをもっと高めて就職活動に活用したい

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

・積極的に授業を受けている

・レベルの高い作品を提出してくるので今後は楽しみ

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

・課題ではなく自分の作品に昇華できるよう頑張ってもらいたい

→自発的に活動して作品づくりができるようになってほしい

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

・業界で必要とされるスキルを身につけて、就職活動の武器になり得るものとしたい

→群馬県内にはポップカルチャーに関連する企業は少ない

【その他】

→全体では課長クラスが連携案件を担当しているため6名ほど

→ポップカルチャー学科だけで言うと連携は少ない

【必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか】

→経験値からそう考えた。教員育成においてはあえて「無茶ぶり」を試してみる

※応えられそうかどうかは見極め、サポートにも入る

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

・現在どのような機会があるか

→学生の長期休みの際に、グループでの職員研修を設けている。個人の専門スキルについては、コスト面も見ながら外部研修に参加させている。全専研の研修も活用

【今後どのような機会を望むか】

→就職に関する定期的な研修(現在月一で教職員向けで実施)

→「伝え方」を実践的に学べる機会※ここ数年でかなり弱くなっている

【上記の(教員の)資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→教職員の評価基準は策定しているが、職業実践専門課程に特化した評価基準はない

【(具体的な事例について)外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→基本は学生からのアンケート回答

【(好事例について)効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール(デジタル・アナログ)がありますか】

・外部との調整用ツール

→基本的にはメールでのやり取り、本案件では長く連携しているから、という部分もある

・成果物を共有・評価のためのツール

→ツールとしてはない

【現状の取り組みについて実感している価値(学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など)以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

- 教職員が持っていないスキルを学生に提供してくれているという点が一番大きい
- それが就職に繋がるとより良いと感じている

○宮崎総合学園（宮崎県）宮崎情報ビジネス医療専門学校

調査日：令和5年11月28日（火）10：00～12：00

調査方法：委員2名による対面調査

【産学連携授業を実施している学科名・目標・時数】

- ・学科名・・・情報システム科 学生数：1年生100名、2年生100名
- ・目標・・・高度なスキル習得
- ・時数・・・540時間 1年前期：週3コマ（半年）後期：週9コマ（1コマ50分）

【産学連携授業を実施している内容】

- ・1年次 AI・アプリ開発に関する講義
 - ・2年次 Python（プログラミング）
- 学校内での授業として実施

【現在の主な連携先企業・団体の名称】

- ・株式会社デンサン 元々学生用のPCを購入するなどのつながりがあった
- IT 機器を取り扱っている

【連携のアプローチはどちらからか】・・・企業・団体側

- デンサン側の事業推進部と教務で連携を組んでやっている
- 次年度の依頼のタイミングは12月頃

【現在の産学連携授業についての満足度】・・・満足している

- 通常の授業では補完できない部分を連携してやっていただいている

【現在の産学連携授業について満足している理由】

- ・現職のエンジニアが、最先端の動向や技術について講義を実施してくださるため

【特に、好事例と感じた授業について、どんな点が評価できたか教えてください】

- ・本校職員ではカバーできない最新の分野について講義していただける点
- IT 分野

【さらなる充実のためにどんな校内外の支援が必要でしょうか】

- ・コストの部分で支援があれば、他の企業への依頼も可能となり、更に充実したカリキュラムを組むことができる

→色々な分野の授業。外部の著名な方をお呼びして学生に還元できると、学生満足度も高まり、カリキュラムも充実すると思う

→コスト面で妥当なのか、他校の水準が知りたい。IT系は高額になる

現状は法人で予算が組まれていて、それをベースに調整をしている

【産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ】

- ・ AI：1年次のG検定受験に向けての講義
- ・ アプリ開発：1年次アプリ開発手法の習得
- ・ Python：2年次のプログラミング応用スキルの習得

【連携先の選定】

- ・ 前年度（またはそれ以前）からの引継ぎ→現在の企業との連携は2年前から

【連携先に初回の依頼をするとき重要視していること】

- ・ 学生に学ばせたい講義内容

→口頭での担当者の方とのすり合わせ

【連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか】

- ・ 講義内容（シラバス）：タイミングは12月～1月までには
- ・ スケジュール
- ・ 費用面
- ・ 本校での授業ルール等

【貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか】・・・いない

→教務課長、部長

【求められる「知識」を3つ】

- ・ 本校の対象学科に関する知識
- ・ IT分野についての専門性：最新の技術に対しての研修に参加
- ・ IT業界についての専門性

【求められる「技能」を3つ】

- ・ コミュニケーションスキル
- ・ ビジネススキル
- ・ ITリテラシー

→文科省委託事業での外部の方との繋がりができる機会があれば積極的に参加している

【求められる「態度」を3つ】

- ・ IT業界の動向に目を向ける

・ 緻密さ

・ 常に迅速な対応

→企業様に求人のお問い合わせをする際に、業界動向などをお伺いするようにしている

【ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか】・・・ない

【担当教員に対してどのような支援を行っているか】

→学科のメンバーと連携している

【担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか】・・・3

※1 が最も低く 5 が最も高く

→外部の先生には月報管理を提出していただいて進捗状況を管理している。また、職員が授業に入って、進捗状況を確認している

【どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか】

・ 先程も回答したが連携推進職員がおりません

【担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか】・・・ない

→学校間での横の繋がりはない

→今後は学科間を超えた連携も行っていきたい。現状、医療と情報は一部行っている。ITリテラシー、医療情報技師等において

【どのように事業評価をしているか】

・ 学生からのアンケート／ヒアリング

→半期ごとに学生アンケートを取っている

【事業の評価規準は明確に設定できているか】

・ まだできていない

→成績評価については企業側にさせていただいている（期末テストの作成、筆記試験）

【外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標】

・ シラバスにあり

【産学連携授業について改善の予定があるか】・・・ある

→企業数を増やしたい、授業数、実施時期（現状だと早い）

【産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか】

・ 現在の科目の選定・見直し

→学生アンケートの結果を企業側にフィードバックしている

【学生からどのようなフィードバックが欲しいか】

・ 授業のわかりやすさ（企業側と共有している）

【外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・優秀な学生の採用に繋がる

【かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか】

- ・学生のスキル向上が目に見えてわかる
- ・企業の就職につながる

【産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか】

- ・IT 業界の先端技術の習得につながりそのスキルを活かして希望する就職が可能となる

【その他】

Q.産学連携研修に向けて、参加してみたい研修

→様々な企業様と繋がれるような懇親会、宮崎県内のIT企業との繋がりが欲しい

※現在の就職先は県内が4割、6割は県外（福岡、熊本）

Q.学生のコミュニケーションスキルを上げるための取り組み

→就職指導、面接練習、企業様へのアポの取り方、レジュメの書き方など

【課題】

・スキルをもった教員の確保。宮崎 IT plus という会合がある。そういう場で教員の確保をしたことがある。

・連携授業が座学中心であり、企業様は教えるプロではないので、聞いているだけで飽きてしまうことある。何を言っているかわからないという学生の評価も多い。

【必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか】

- ・本校の対象学科に関する知識→企業様に説明しなければならないため
- ・IT 分野、業界についての専門性→専門の知識が必要なため

【必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか】

- ・現在どのような機会があるか

→全専研の研修等

- ・今後どのような機会を望むか

→最新の技術に対しての研修に参加（費用面でのバックアップ）

【上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか】

→特に実施していない

【（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか】

→学生の授業アンケート評価を共有

【(好事例について) 効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール (デジタル・アナログ) がありますか】

- ・ 外部との調整用ツール

→Slack のみ (学生、企業が入っているチャンネルがある)

- ・ 成果物を共有・評価のためのツール

→Slack

【現状の取り組みについて実感している価値 (学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など) 以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか】

→AI を知識だけでなくどのように現場で活用しているのかを知り、現場のイメージを共有すること。そうすることで就職後のギャップを防ぐことができる

→全て1年次に実施。通常授業で企業が授業に入って実施

3-3 ヒアリング調査結果から見えたこと

- ・平均的な産学連携授業の時間は「60時間」実施が多かった。また、通年で行っている学校については「540時間」という非常に長いケースもあった。
- ・連携内容についてはカリキュラムの一部を担当してもらい演習や実習を行う「学内連携型」と外部のイベントや企業の制作物を作成する「学外連携型」の2つに分かれている。
- ・連携先企業の特徴は地元でつながりのある企業が中心だが、中には行政と連携して数多くの案件に取り組んでいる学校もあった。アプローチについては「学校側」からと「企業側」からが半々であった。
- ・連携授業に関する「満足度」について、6校中5校は「満足している」状況であったが、「満足していない」学校もあった。その理由としては、「連携している企業数の不足」が挙げられた。
- ・産学連携を推進するために求められる資質としては、ほぼ全ての対象校に共通しているのは「コミュニケーションスキル」であった。
- ・「担当教員への支援」として共通していたのは先輩や上司からの「直接の助言」が共通していた。
- ・連携授業の事業評価の方法としては「学生アンケート」の実施が多かった。
- ・「評価規準」について対象校のうち半分しか設定出来ておらず、出来ている学校については「成果物の採用」や「展示出展」、「学校で作成している評価シート」などがあつた。
- ・資質能力向上のための支援として多かったのは「外部への研修参加」であり、その中でも全専研の研修を活用しているケースが多かった。
- ・「産学連携授業」についてはそれぞれが価値を感じており、推進していきたい気持ちはヒアリング対象校全てに感じられた。その思いと同じように課題も感じており、「人員の不足」や「コストに関する問題」は共通して抱えていた。また一部「連携先企業の開拓」も課題として挙げられていた。今回のヒアリング調査結果から課題を感じている学校へのフォローにつながるような講座や研修の開発を進めていきたい。先進的に連携授業を行っている学科のケーススタディの共有や、地域的に連携する企業が限定されてくる学校への有益な情報提供などを行っていければと考えている。

第4章 『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』 検証講座

4-1 第1回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』 概要

本講座は、最終的にファシリテータ育成講座を完成させるための「検証講座」として、職業実践専門課程において産学連携を推進する先生方が企業と協働する意義や価値を再確認するとともに、その実現に必要な考え方や視点を得ることと、カリキュラムに実装する準備の機会としていただき、これからの社会で活躍できる人材育成のために産学連携を「キャリア教育」の視点でアップデートできるようにするための内容として、下記の①～③を目的として実施した。

- ①令和5年度に作成したサンプル講座を元にいったん講座を実施してみる
- ②受講者からの率直な意見や感想、得たものやもっと欲しい部分を検証する
- ③事後アンケートを通じてどこまで理解できているかを確認する

【受講対象】

委員会参加校から幅広く募集

【受講者】

8名

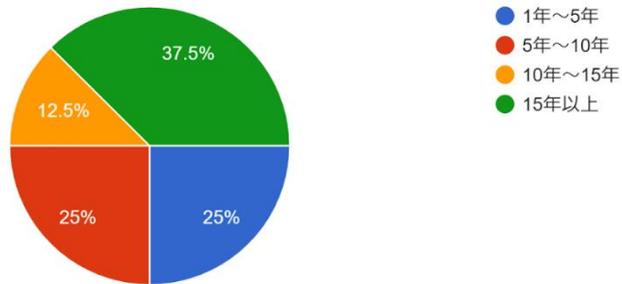
【実施時期】

令和6年9月25日（水）・26日（木） ※東京にて対面実施

4-2 第1回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』終了後アンケート結果

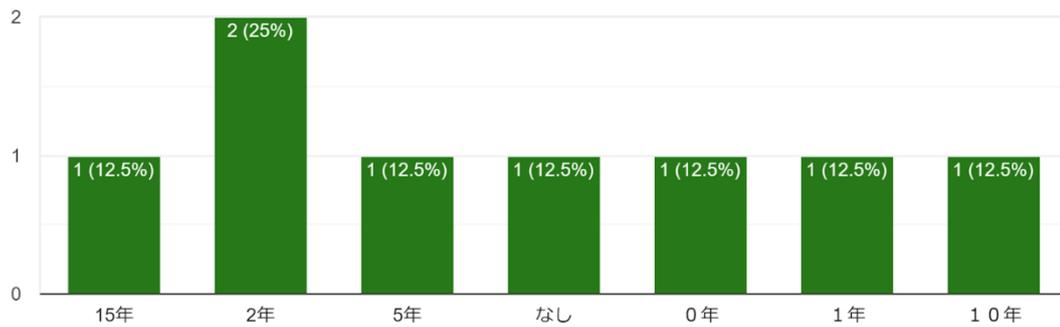
専修学校における教職員経験年数

8件の回答



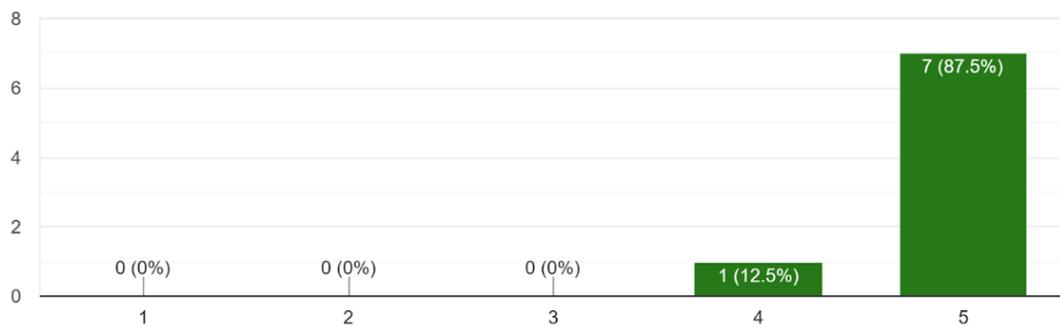
産学連携の担当年数

8件の回答



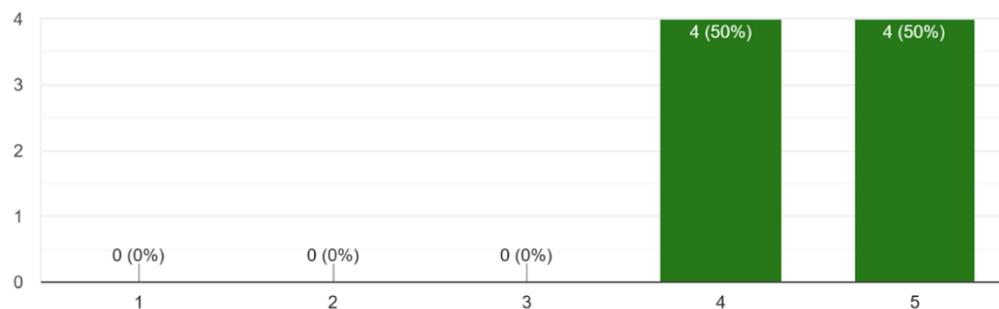
講座の満足度はどうでしたか。

8件の回答



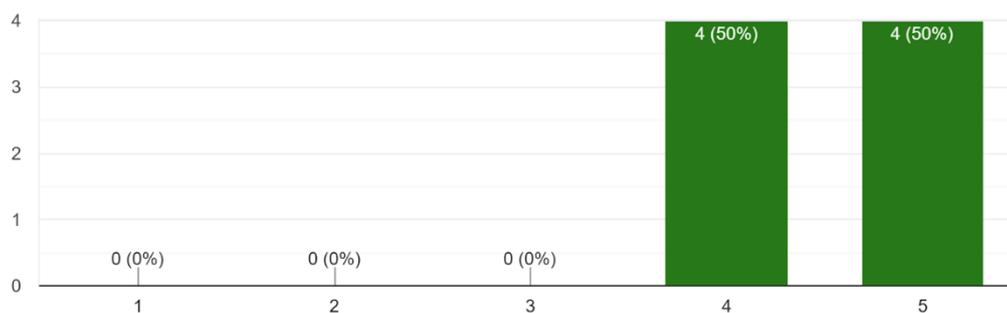
講座の内容は理解できましたか。

8件の回答



講座に参加して、今後担当もしくは関係する学科...進に関し、やるべきことが明確になりましたか。

8件の回答

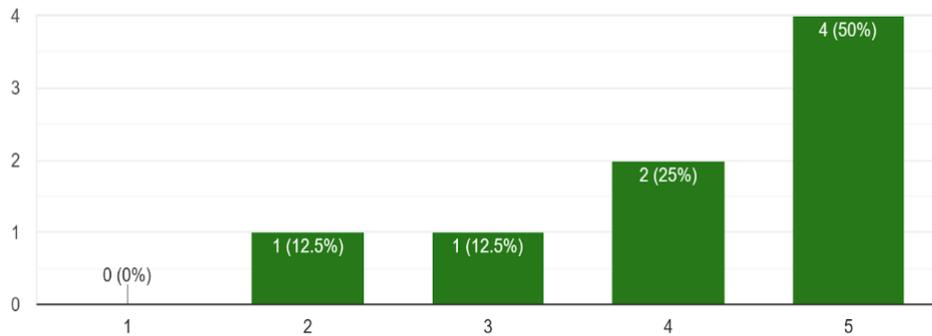


【学びになったこと】

- ・他校の取り組み方
- ・他の学校も同様の課題を持っていること
また、それを解決するために多様な取り組みをされていること
- ・ディプロマポリシーとカリキュラム・企業連携の関係性
- ・ディプロマの考え方
- ・ディプロマポリシーについて深い学びになった
- ・ルーブリックの評価の作成、言語化の難しさ
- ・改めてDPの重要性を考えるきっかけになった
- ・様々な学校の取り組みについて伺うことができたので自校に生かせそう
- ・他校の先生方との意見情報交換、講座の内容と進め方

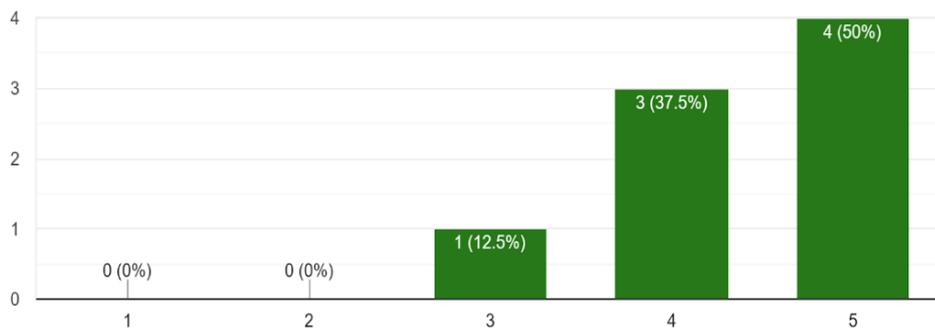
「ワークシート」はわかりやすかったですか。

8件の回答



「講座で使用了スライド」はわかりやすかったですか。

8件の回答



【改善点】

- ・ 今回の内容であれば1日完結でお願いしたい
- ・ 教員以外にも就職・広報など他の職員も参加して意見を聞いたらいいと感じた
- ・ 事前課題の記入例があればよい
- ・ 職業実践専門課程の定義を改めて確認する
- ・ どのように考えて欲しいのか、説明を丁寧に
- ・ ワーク時間が少ない
- ・ 答えありきなのかなと思う箇所が多々あった
- ・ 専門学校ごとに取り組みが異なるため、モデルケースがあればわかりやすい
- ・ とても濃い講座内容ですので、各テーマ時間がもう少し欲しい

4-3 第2回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』検証講座

本講座は最終的にファシリテータ育成講座を完成させるための「検証講座」として、9月に実施した第1回目から、①到達目標の見直し、②研修対象は学科の領域を統一、③産学連携における課題感・アップデートポイントの例示、④シナリオ分析は企業連携にフォーカス、⑤評価規準と評価手法の確定までを必須に、⑥今後開発するファシリテータ養成講座につながるの6点を追加・修正して実施した。

【受講対象】

専門学校でクリエイター系に携わる教職員

【受講者】

9名

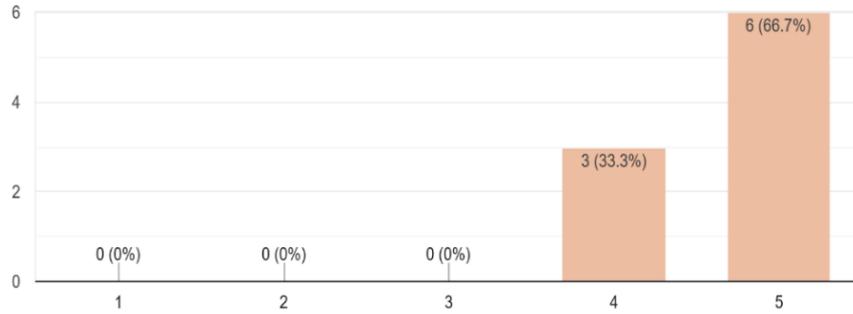
【実施時期】

令和6年12月9日（月）・10日（火） ※京都にて対面実施

4-4 第2回『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』終了後アンケート結果

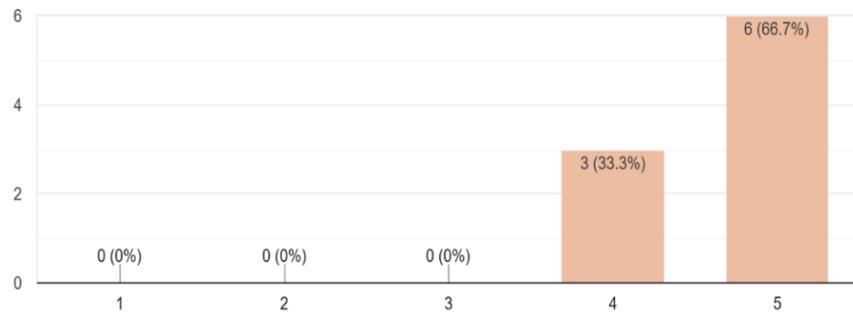
講座の満足度はどうでしたか。

9件の回答



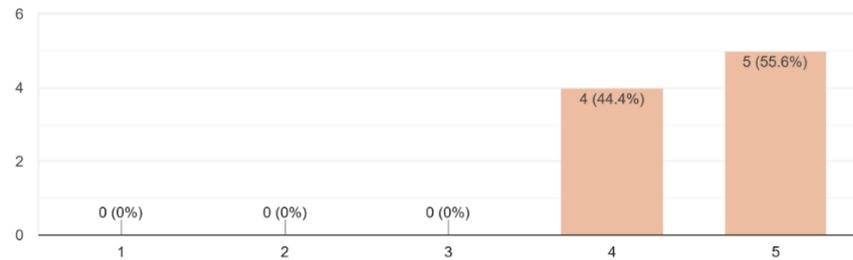
講座の内容は理解できましたか。

9件の回答



講座に参加して、今後担当もしくは関係する学科...進に関し、やるべきことが明確になりましたか。

9件の回答

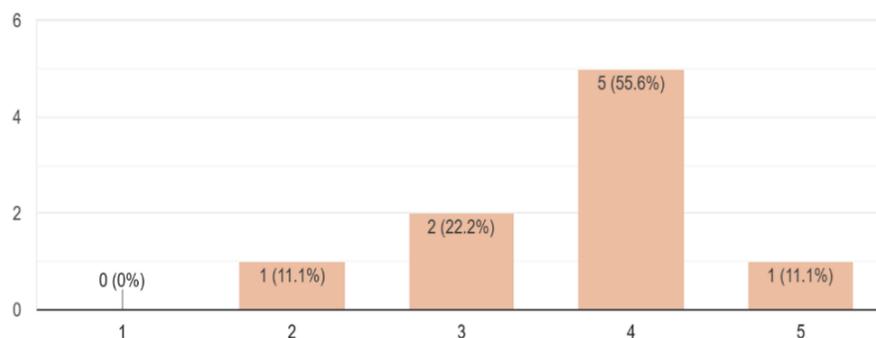


【学びになったこと】

- ・参加者間の取り組みや課題、内容の違いが参考になった
- ・俯瞰して現在取り組んでいる企業連携について考えられた
- ・評価方法で学生の思いと企業の受け取り方をすり合わせるという視点
- ・エピソードを通して連携の動き方が参考になった
- また他校での取り組み内容などをお聞きしとても道が開けた
- ・企業連携を実施する際の、評価基準、評価方法について掘り下げられた
- ・各学校の先生方と情報共有できたこと
- ・学生主体の学びを進める手法
- ・各学校の先生方の評価基準

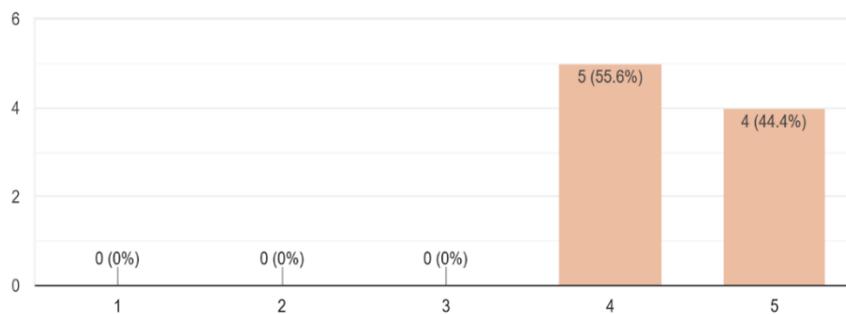
「ワークシート」はわかりやすかったですか。

9件の回答



「講座で使用したスライド」はわかりやすかったですか。

9件の回答



【改善点の提案】

- ・「職業実践専門課程」や「産学連携」の定義付けの共有が欲しかった
- ・同じチームの方と、最初にどんな連携をしているのか共有する時間が欲しかった
- ・ワークシートへ記入する時のレベル感（理想か現実か）があると手を動かしやすい
- ・ワークシートの項目内容が分かりづらく、何を書けばいいのか悩む場面が多かった
- ・9名だけの実施ではとてももったいなく感じた
- ・各ワークシートについてのサンプル案などを提示していただければありがたい
- ・ワークシートの中で何を書けばよいか分からないものがあった

4-5 『産学連携推進のための教員スキルアップ研修』検証結果

- ①第1回・第2回共に、研修における学習内容そのものへの満足度は高く、目的は一定レベル達成された
- ②第1回の検証を経て、次年度以降の展開を見据えて「受講対象者」の見直しを行った。そうすることで、第2回目はより研修のターゲットが明確となり、内容の調整ができ、受講者の満足度向上につながった
- ③第1回の検証を経て、研修の内容・構成・時間配分について見直しを行った。大きなポイントとしては、目標をスケールダウンすることで、
 - ・キャリア教育の視点を通じ、学生の「資質能力」の育成と「カリキュラムのディプロマポリシー」とのリンクの明確化
 - ・カリキュラムにおける学生の「資質能力」の評価についての理解・検討・共有にフォーカスを絞り、前回組み込んでいた「課題解決プラン」をオプションとしたことで、内容的焦点化と物理的余裕が生まれた。

第5章 産学連携推進リーダー育成講座

5-1 産学連携推進リーダー育成講座概要

本委員会で開発した『産学連携推進員育成講座』を使用して、企業と協働する最適な方法とその実現に必要なスキルをアップデートし、各校・各地域において「産学連携推進員」を育成する立場としての活躍を目指す。

【受講対象】

専門学校で産学連携を担当している教職員、もしくはキャリア教育（就職・キャリア支援等）に関わる教職員

【受講者】

10名

【実施時期】

令和7年9月25日（木）13：00～17：00

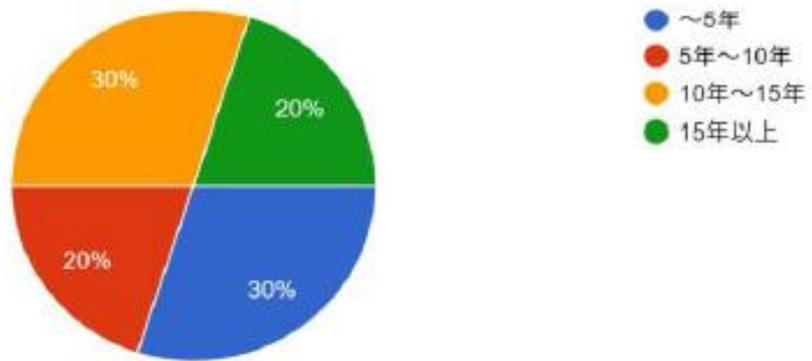
令和7年9月26日（金） 9：00～13：00

※1時間程度の事前学習あり：動画視聴（約10分）とワークシートの記入

5-2 産学連携推進リーダー育成講座研修終了後アンケート結果

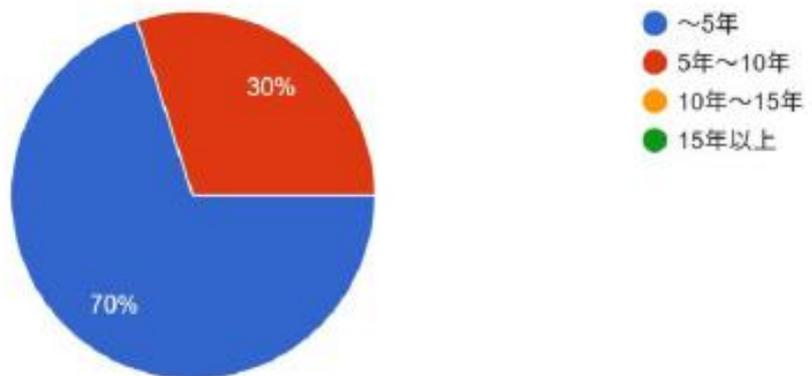
専修学校における教職員経験年数

10件の回答



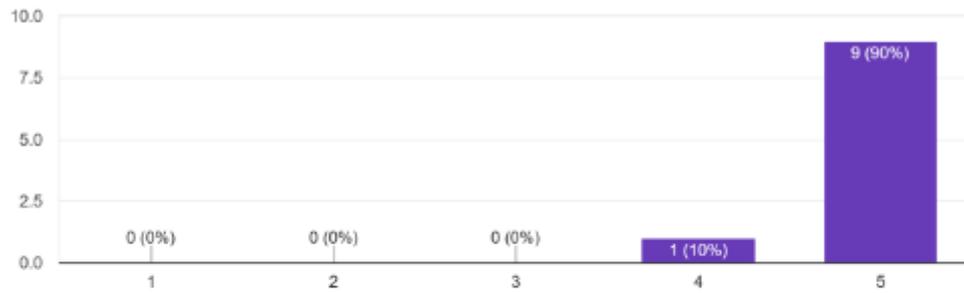
これまで産学連携に関わった年数

10件の回答



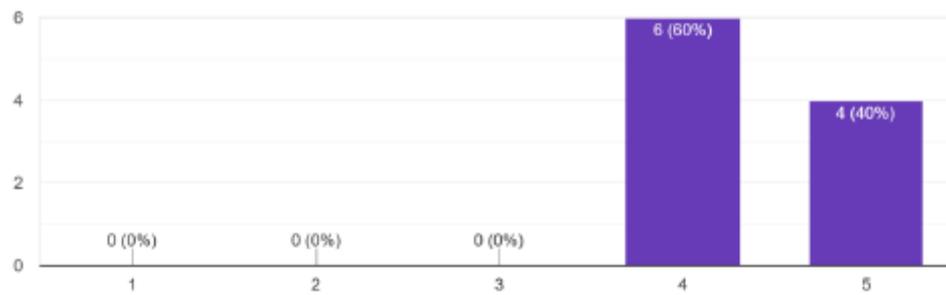
研修の満足度はどうでしたか

10件の回答



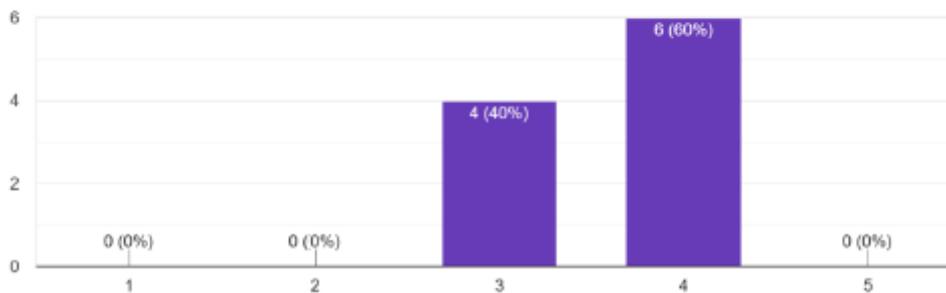
研修の内容は理解できましたか

10件の回答



研修に参加して、自身が講師として研修を実施する準備はできたと思いますか

10件の回答



○上記の設問に（講師として研修を実施する準備について）回答した理由について

- ・講師として研修をするつもりで受講してましたが、1つ1つの問いに、ループしてしまいました。しっかり自分自身での振り返りを行いたいと思います。
- ・それまでのワークを通していつ、誰に、どのように実施するかを考え、共有する機会があったので思ったよりもスムーズに準備案が出てきた。
- ・対象者と目的が設定できたため
- ・研修を通じて産学連携の必要性は理解できたうえで、個人の知識ではなく学校として取り組んでいかなければならない事柄だと思うため。
- ・準備の評価は実施してみないとわからないため
- ・ファシリテートする経験不足等、講師に必要な力を身につける時間が必要に思います。
- ・学内で産学連携をしており、共感してくれる教員がいるため
- ・イメージはできたが、まだまだ机上の空論で具体性にかけるのでさらにブラッシュアップしてより良いものを目指していきたい。
- ・自分の産学連携への取り組み歴がまだ少ないため、成功・体験談の蓄積が足りていないと感じた。また、全職員に研修を行うにあたり、職員の意識づくりをするためには、副校長や部長などの意識改革も必要だと感じた。
- ・スライドやトーク等の調整は必要だが、意義と方針は十分理解できていると思ったから

○研修実施までに、不安なこと、支援してほしいことはありますか（任意）

- ・まだ不安なことまで出ませんが、実施した方からの共有。
- ・不安なことがあればコミュニティ、キャリアリンクさんにお声がけさせていただきたいと思います！
- ・自分の言葉に変える場合に変換し難いことがあれば、助言いただけると有難いです
- ・研修の内容を自分の中に落とし込めるかどうか
- ・不安なことや迷うことがあれば、研修と一緒に参加された皆さんと情報共有させていただきたいと思います
- ・受講生が迷ったときのアドバイスが的確にできるかが不安です。
- ・自分ができることから進めていきたいと思います。段階に応じて相談いたします。

○研修実施予定が決まっている方は、いつどこで誰を対象にしているか教えてください

(任意)

- ・まだ未定ですが年度内にできればと思います。
- ・次年度のカリキュラム検討時に組み込みたい
- ・未定（来年2月が有力）／学内教員
- ・特にまだ決まっていないので、上長と進めていきたいです。
- ・まだ具体的には決まっておりません

第6章 まとめ

6-1 産学連携推進育成講座完成版について

本委員会では、職業教育における産学連携がもたらす代表的なメリットとして、学習目標の明確化、実践的な教育の実現、最新のトレンドや技術の習得、就職支援の強化、地域産業の活性化などが挙げられます。こうしたメリットを最大限に活用するために、学校と企業の連携を積極的に推進するための人材を配置することが重要であると考えた。

このため、本事業では、専門学校が企業と協働する最適な方法と、その実現に必要なスキルを身につけた推進員を育成するために本講座を開発しました。

この講座を受講することで、これからの社会で活躍できる人材育成のために産学連携（職業実践専門課程認定要件の企業等と連携）を「キャリア教育」の視点でアップデートできるようになるための講座が完成しました。

6-2 産学連携推進リーダー育成講座完成版について

本事業で令和6年度に開発した「産学連携推進員育成講座」の内容を紐解きながら、理解・体得することで、自校もしくは各地域において、「産学連携推進員」を育成する立場としての活躍を目指すために学習するための教材として作成しました。

本研修に参加された教職員の先生方においては、今回の研修で得た知識や経験を自校等に持ち帰り、これまで以上に産学連携への取り組みを充実させて行ってもらいたいと思います。

6-3 成果の活用と今後の課題

「職業実践専門課程」とは、「専門学校のうち、企業等と密接に連携して、最新の実務の知識・技術・技能を育成する実践的かつ専門的な職業教育に取り組む学科を文部科学大臣が認定する制度」であるため、産学連携は非常に重要なキーであると考えられます。

また、専門学校を取り巻く環境は日々変化しているため、時代に合った形に産学連携の在り方も定期的にアップデートしていくことが必要です。

本事業の成果報告により3か年計画は完了となるが、産学連携の取り組み方について様々な課題や悩みを抱えている地域や学校も多くあることが調査を通じて分かりました。

今後の専修学校における質保証・向上の推進の際に、今回開発した教材を有効に活用していただければ幸いです。